碧玉の瞳

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
碧玉の瞳

【Ｎコード】
Ｎ８９１７Ｋ

【作者名】
ふとん

【あらすじ】
―――これは、いったい何なのだ。

いつもの時間、いつものホーム、歩美は確かに電車に乗ったはずだった。
しかし気がつくと、そこは自分の世界ではなかった。

1

何の文字もなく、何の言葉もなく、ただその画面は深く鮮やかな緑を映していた。

混沌でありながら、当然のごとく理路整然と並び、そして異質な存在感を持って投射され、人の手で作り出されながら、あたかも神が恩恵をもたらして生み出したような錯覚を与える。

これ（・・）はいったい、何なのだ。

膨大な知識量をもって語りかけてくるこれ（・・）を果たして人が扱う道具と呼んでよいのだろうか。いや、これ（・・）はすでに神の道具と呼ぶにふさわしいのではないのだろうか。でなければ、これ（・・）は恐ろしい悪魔の道具だ。

2

排気ガスのスモッグに霞んだ朝日を思う人もなく、その地下の駅はごった返していた。

その面々は多種多様でしめられている。まるで何かのカーニバルでもあるのかというほどの混み合いだが、人々の表情は心なしか不機嫌だ。

いつもの朝の光景だ。

そんな人ごみの中で、彼女は小さく欠伸をした。カラスの濡れ羽色のごとく真っ黒な髪をおさげにした、今時珍しいほど質素な容姿の学生である。ブレザーとプリーツスカートよりも時代錯誤的なセーラー服が似合うだろう。肩に掛けた流行の鞄が辛うじて彼女を現代にとどめているようだった。

プラットホームに立つ彼女は他の人々同様、少しつまらなそうにうつむいて、自分の足先だけを見ていた。

ざわめきの中で女声のアナウンスが地下鉄の到着を告げる。

苛立った雰囲気さえ含んだ群集が少し息をつく。その手前を耳障りな音とともに電車が通り過ぎ、風を撒き散らして漸く止まると、空気が抜けるような音とともにドアが一斉に開く。

音に促されて人々の足はドア先へと集中し、箱に自らを積み込んでいく。

彼女も足を踏み出した。サラリーマンの後をついて、電車の中へと入る。

少しでも身じろぎすれば、他人の足を踏んでしまいそうになる車内に彼女も立ち入った――。

――そのはずだった。

まばたきの瞬間。それは刹那の出来事である。

彼女は車内を見回した。先ほどまで彼女の前を歩いていたサラリーマンの姿はない。それどころか、座席にいたっても誰の姿もない。後部車両へと続くドアも開け放たれて、トンネルが延々と続いているようでもある。

「な…なに…？」

思わず声を洩らしたが、彼女は咄嗟に口を閉じた。自分の足元から、まるで沼から這い上がってくるように灰色の腕が伸びてきていたのだ。何かを求めるようにうごめくそれは、地獄の死者の腕にも見えた。

その後ろでドアがゆっくりと閉じた。

彼女は咄嗟にドアをこじ開けようと取っ手に手をかけるが開かない。

地下鉄はそろそろと動き始め、徐々に速度を速めていく。

彼女がドア脇にある緊急用の手動切り替えボタンを叩き押そうと手を伸ばした時には、電車は長いトンネルの中へと滑り出していた。

暗闇の中で移り変わるトンネルの壁を見つめて、彼女は半ば茫然と脱力する。

そんな彼女の足を引っ張るものがある。

視線を落すと、彼女の足には床から這い出してきた灰色の腕が三本絡み付いている。

「っ！」

彼女は声も出せずに顔を引き攣らせる。足首からふくらはぎ、そして膝まで這い登ろうとしている腕に体温はない。まるで氷だ。

彼女は眩暈を起こしそうになったが、意を決してその腕をカバンで叩き払った。腕は驚いたようにふっと力を抜いて、床に落ちる。

なおも這い登ろうとしていた腕を全て叩き落すと、彼女は後部車両に向かって走り出した。

ふと彼女は走りながら振り返る。今までいた車両には床を埋め尽くすほどの腕が空を掴んでは何かを求めている。

彼女は泣きそうになりながら、車両を走りぬけた。

走り抜けていくと同時に、通り抜けた車内の電灯がガターンという奇妙な音ともに消えていく。音の余韻が彼女を追う。
不気味な腕、謎の音、消えていく明かり。彼女は恐怖に顔を引き攣らせる。
恐怖と連動するかのような膝からの震えで足がもつれて彼女は倒れこみそうになる。だが、彼女はかろうじて歯を食いしばり、走りつづけた。
十二両編成の車両はあと少しだ。
目の前に最後尾の車両が見えてきた、その矢先。ズゥンと腹の底から揺さぶる大岩を砕くような大音響が彼女の背後から響いた。
かぶさってきた大きな影に彼女は思わず振り仰ぐ。
それは、異様としか言いようのないものだった。電車の天井につかんばかりの上背の、床が沈み込みそうな巨体である。男とも女ともわからない、でっぷりと太った体は漂白したように白い。そしてその首のない顔についているのは、奇妙に笑った仮面だった。
巨体に耐えられないのか、床はきいきいと軋み、今まで彼女を追うように這いつづけていた腕たちはいつのまにか姿を消していた。
ただ不気味な仮面が彼女を見下ろしている。
彼女はそれを見上げたままあとずさる。
仮面は動こうとはせず、ただ彼女を見つめ続けている。
彼女は素早く仮面に背を向けて走り出そうと、足を大きく踏み出した。だが、彼女は思い切り何かにぶつかった。
勢いのまま跳ね返されて、彼女はしたたかに尻もちをつく。
「――――…っ！」
意識が飛びそうになりながらも、彼女は自分に覆い被さった影に気がついて見上げる。
仮面の巨体が腕を伸ばして、今しも彼女の首をもぎ取ろうかと言うように手の平を大きく広げている。
彼女は絶望に襲われて目をきつく閉じた。

3

「佐々木さん」
彼女はとっさに目を開けた。
「佐々木歩美さん」
目に飛び込んできたのは、何の変哲もないただの白熱電灯だった。
目障りな明るさに、彼女は眉をしかめた。
「ああ、良かった」
声の方へと視線を移すと、そこには心配そうな顔の車掌が彼女を覗き込んでいた。
意識が混乱して、彼女は一番新しい記憶を呼び起す。
たった今、彼女は仮面の巨体に殺されかけたのだ。
だが、ここはどこなのだろうか。背中にあるのは少し固いがクッションだ。冷たい床ではない。首に触れても、胴と首は繋がっている。
彼女は朦朧とする意識を叩き起こして、半身を起こした。
ここはどこかの事務室だった。
「……ここは…」
「地下鉄のホームで倒れたんだよ。覚えていないの？」
中年の車掌は安心したように笑んだ。
「……倒れた？」
電車の中を散々走り回れば、倒れもするかもしれないが今、その疲労はない。悪寒が走るほど冷たい手で触られた足にもその感触は残っていなかった。
「あ、あの…ここは何駅ですか？」
彼女の問いに、車掌は目を丸くしたが少し混乱しているのだろうと判断したのか素直に答えてくれた。
「田路原駅だよ」
彼女が電車に乗り込んだ駅からたった三つ先の駅である。

彼女は急いで腕時計に目をやった。時計の針はすでに九時を回っている。
「学校……！」
車掌に礼を言ってから、彼女は隣に置いてあった自分のカバンを掴んで勢いよく事務室を飛び出した。
事務室は改札口のすぐ近くだった。改札口を通り抜けるとすぐに地下へと続く階段がある。
彼女は階段を駆け下りて、ちょうど着いたばかりの電車に飛び乗った。
乗車客は少なかった。
長い座席には端と端に点々と座っているだけで、喋る人もないので静かだ。
彼女はドア近くにもたれかかった。
（さっきのことは、夢だったのよ……）
しかし夢にしては臨場感がありすぎた。どちらかといえば、今、こうして電車に乗っているのが不思議なくらいだ。
彼女は少し思い出して身震いする。
薄気味悪い灰色の腕に奇妙な仮面を被った巨人。そして、誰もいなくなった電車。
彼女は辺りを見回した。

そして、息を呑む。

カタンカタンと電車は規則的に揺れている。
だが、人の姿はこつぜんと消えていた。
誰も居ない車内で吊革だけが微かに波打っている。
彼女は声を無くして、ドアにへばりつくように背中をはりつける。
その彼女の首をドアから何かが掴んだ。首をしめあげるでもなく、ただ掴んだのである。
強張る瞳に映ったのは、灰色の腕。

体温の欠片もない手に触れられて、彼女は青ざめた。
気が付けば、足、腰、顔といわず、灰色の腕が絡みついているのだ。
灰色の腕は徐々に彼女の体をドアへと引き寄せていく。
「きゃあああああああっ！」

4

彼女は自分の叫び声で飛び起きた。
息を切らせて辺りを見遣って、見覚えのある広告を見つける。
ここは朝に乗り込んだ電車の最後尾だった。
薄暗い車内のシートに何時の間にか寝かされている。
「ああ、起きたの」
男の声だ。彼女が振り返ると、薄い茶髪の男が車両に入ってきたところだった。肩より少し長い髪を一つに束ねて、ラフなシャツにジーンズといった格好だ。スニーカーの足も軽やかに彼女の前に立つと腰をかがめて、シートに座ったままの彼女の顔を丸めの黒い眼で覗き込んだ。
「……あの…私は……」
彼女は混乱しながら男に視線を合わせた。
改めて見ると、この男は世の女から嫉妬されそうなほど端正で上品な顔立ちだった。
彼はにっこりと微笑む。
「キミ、かわいいねぇ。なんか、こうマニアックなカンジで…」
口を開くとボロが出るタイプらしい。
彼女は即座に態度を改めた。
「ここはどこ？　あなたはだれ？」
怒鳴るような調子で言った彼女に彼は少し目を丸くしたがすぐに笑んだ。
「良かった。頭のいい子みたいだ」
「……？」
彼女が不審な目を向けるのも気にせず、彼は一つ前の車両に呼びかけた。
「おーい。お嬢さんがお目覚めになったぞー」
呼びかけに応えて現れたのは、長身の男だった。黒フレーム眼鏡

の奥のどこか怒ったような無愛想な眼で彼女を一瞥すると、裾の長い黒コートをひるがえして茶髪の男の隣に並んで彼女を見下ろす。
冴えた雰囲気を漂わせる長身の男の眼は、赤い。黒髪のために余計に目立つ色は鮮やかな紅玉を思わせる。
彼女が少し眉を寄せると、彼は双眸を隠すように視線を逸らした。
「ここは君が乗ったはずの電車だ。そして俺たちは君を保護した者だ」
男の声は無愛想で低かったが、よく透る声だった。
「……乗ったはず？　どういう意味？」
「実際にキミは電車に乗ったんだ。だけど、どういうわけか、“こっち”に落ちちゃったみたいだねぇ」
軽い口調で言った茶髪の男を彼女は見上げる。
「こっち？」
「話がこじれる。黙っていろ」
長身の男は自分より少し目下の軽口を叩く男をたしなめるが、茶髪の男はおどけて困り顔を作った。
「だってさぁ、こっちにも彼女にも事情があるんだし。ラファエルは何て言ってきたんだよ」
茶髪の男は長身の男に視線を移す。
「保護観察」
「うっそぉ！　お前大好きのラファエルが？　女の子をそばに？」
溜息をつく長身の男を他所に、茶髪の男は一人嬉しそうに笑う。
長身の男は彼を無視して話を進める気らしく、彼女を見遣る。
「電車に乗ったはずって、どういう意味？」
彼女は男が話し始める前に、質問を投げておくことにした。彼らはこの説明を避けたがっているように思えたのだ。彼は少し目を細めたが、淡々と話し始める。
「乗ったはずというのは、言葉どおりの意味だ。電車に乗ったが、君はこちら…『ソドム』にどういうわけか落ちてしまった。それで、住人たちに歓迎を受けた」

「……住人？」
「床から這い上がってくる腕や、仮面の巨人を見ただろう。彼らは『ソドム』の住人たちだ」
彼女は思い出して、立ち戻る悪寒に腕を抱いた。
「……その“そどむ”って何？」
尋ねてから、彼女は自分が目の前にいる彼らを質問責めにしていることに気付いて口を閉じる。だが、長身の男は元から辛抱強く説明する気だったらしく、さして気にする様子もなかった。
「ソドムは、多次元構造の異空間……君が普段暮らしている世界の裏側にある世界と思ってくれていい。君の世界にはこちらの世界に通じる穴が無数に点在している。そうそう開くものではないが、君は落とし穴に運悪く落ちてしまった」
「まぁ、たまにいるんだよ。俺たちが開いたホールに落ちちゃう人が」
納得しかけた彼女は、横合いから耳に入ったこの言葉で顔をしかめた。
「……話がこじれるから、黙っていろと言っただろう」
長身の男は不機嫌に茶髪の男を見遣る。
「だって本当のことだろぉ？」
茶髪の男は自分のせいではないとでも言うように軽い口調で肩をすくめてみせる。
彼女はじっとりと二人を睨みつける。
「……じゃぁ、このソドムってところに落ちたのは私の責任じゃなくて全面的にそちらの不手際によるものなんですね」
「……そういうことになる」
詰問する気でいた彼女に肩透かしをくらわせたのは、意外にも長身の男だった。彼女はやる気を削がれて首を振る。
「それで……私はどうすれば元の世界に戻れるんですか？」
今度は二人が眼を丸くした。茶髪の男は軽く口笛を吹く。
「やっぱり頭のいい子だ」

「納得したわけじゃないけど、実際に今、わけのわからない世界にいるんでしょう？　だったら郷にいっては郷に従うしかないわ」
彼女は不機嫌に口をすぼめる。
「そうしてくれると助かる」
そう言った長身の男は少し表情を緩めた。何処となく彼の周りを取り巻いている、冴えた雰囲気が柔らかくなる。
「穴は四六時中開いているわけじゃない。穴はそれぞれに開く時間がある」
「……つまり、その時間にならないと元の世界に戻れない……？」
彼女は思わず顔を引き攣らせた。だが、茶髪の男ははしゃぐように長身の男の肩を叩く。
「なぁ、この子すげぇ順応早いぜ。いっそパラダイスに引き入れる？」
彼女は半ば脱力して溜息をついた。そんな彼女に長身の男が追い討ちをかける。
「悪いが、こちらも少々仕事がある。それが終わり次第、君を元の世界に戻すからそれまでは大人しくしておいてくれ」
「おいおい、いいのか？」
茶髪の男は驚いた様子で長身の男を見遣った。
「ラファエルの指示だ。足が遅くなるのは仕方がないそうだ」
「えらく寛大になったなぁ」
これ以上の詮索はできないと思ったのか、茶髪の男は肩をすくめる。
「保護も仕事のうち、ね。……ええと、じゃぁこの子の名前、何にする？」
「ちょ、ちょっと…どういうこと？」
彼女が戸惑って会話に割り込むと、茶髪の男はにこりと微笑んだ。
「ここではね。物の名前がえらく力を発揮する場所なんだ。だから、本当の名前は使えない」
長身の男はこちらに背を向けて、ドア前へと立つ。

「君の名前はこれからソフィア。いいな」
「……ソフィア？」
長身の男に彼女は不審な目を向ける。だが、彼はそれ以上応えようとしないので、次に茶髪の男を見遣ると彼は珍しく顔をしかめていた。
「それ……」
「ラファエルからの指示だ。あちらでもサポートのためにこちらをサーチするらしい。その識別信号だそうだ」
長身の男は茶髪の男の言葉を遮るように緊急のロックに拳を叩きつける。砕け散るカバーガラスとともにドアがゆっくりと暗い口を開けた。

5

悪魔の道具と言うならば、その見返りは？
神の道具と言うならば、その生贄は？
いずれにせよ、彼の道具には犠牲が付き物だ。
崇高なる魂を内包した、汚れ無き贖罪の山羊が。

穴倉は、地獄の底に通じている。
古来、洞窟は祭式の場であり、神聖な場であり、墓場だった。
だが、この地下に静謐な空気はない。
ただ混沌が猥雑な色を帯びて何処までも浸透しているかのようだ。
彼女は前を歩く二人の男について、道を歩いていた。
ブレザーと短めのプリーツスカート、流行りのショルダーバック。
だが本人の意図がどうであれ、おさげにされた長い黒髪は時代錯誤なセーラー服が似合うように思われる。いずれにせよ、ここでは酷く浮いて見えた。
路地裏といえば、まだ聞こえが良い。廃墟にバラックが建ち並ぶ隙間に、大勢が通って出来た道である。
人の姿はない。ただ、崩れたビルのコンクリートが風化し、得体

の知れない蔦が廃墟に絡み付いている。
生暖かい微風が吹いているにも関わらず、体温は少しずつ空気に奪われていく。暑いのか寒いのか判らない心地悪さで空を仰いでも、空はない。
複雑にブロックを組み合わせた天井である。地面から天井までは主都にある高層ビルがすっぽり入るほどある。ともすれば、天井が暗い空にも見えた。だが、遠くに見える機械的な骨組みがそれを否定する。そのくせ辺りは曇りの日程度の明るさがあるのだ。不思議といえば不思議だが、ここが異世界だと聞かされていれば、自分の持っている常識が通じないのだと感じるだけだった。
視覚の探検に飽きて、彼女は眼前の男達に視線を戻した。
一人は、ラフなシャツにジーパン姿の茶髪の男である。もう一人は、黒コート姿の黒髪の男だ。
居並ぶと茶髪の男の方が黒髪の男よりも少し背が低いが、二人とも彼女の頭二つ分は高い。
地下鉄のトンネルから出て何時間こうして歩いているのだろうか。ローファーの爪先がいい加減、ジクジクと痛んだ。
腕時計を見遣るが秒針は時を刻まず、遡っている。
逆回転しているのだ。
規則的な微音は刻々と時間を略奪していく。
「……ねぇ」
時間の逆算に疲れて、彼女は変わらない速度で前を歩く二人に呼びかける。振り返ったのは、茶髪の男だけだった。
「なぁに？」
にっこりと笑う彼は、羨望を独り占めにしてしまうような端正な容貌である。微笑まれれば誰であれ呆けてしまう、かもしれないが彼女は顔をしかめた。
「いつまで歩くの」
「まだ二時間程度しか歩いていない」
振り返りもせず、応えたのは黒髪の男だった。

ますます彼女は口を歪める。
「アテもなく歩いてるわけじゃないんでしょ」
「確かに」
とうとう彼女は黒髪の男を睨みつけた。
「まぁまぁ。怒っても疲れるだけだって」
宥めるように茶髪の男は場を取り繕う。
「アズラエルも、もう少し言い方を考えろよー。部下の兵士じゃないんだから」
名を呼ばれて、黒髪の男はようやく振り返る。冷淡な印象のくせに、黒フレームの眼鏡の奥にあるのは紅玉のような赤い目だった。
「確かに急ぐ仕事ではないが、時間もない。事情の説明をできるのか？　ラグエル」
彼らも、名前が大きな力を持つというここ、ソドムでの名前を決めている。
黒髪の男はアズラエル。
「勘弁してくれよ。喋ると舌を抜かれるんだ」
茶髪の男はラグエルといった。
おどけて肩を竦めると、ラグエルは彼女に向き直る。
「まぁ、じきに慣れるよ。名前にもね」
彼女にはソフィアという名前が与えられた。
名付けるというより、標識としての名前らしいが、
「なにも、天使や聖人の名前じゃなくてもいいんじゃないの？」
アズラエルやラグエルはイスラム教やキリスト教の天使の名前、ソフィアは伝説上の聖人の名前だ。
「上司の趣味だから」
軽薄なラグエルには珍しく苦笑した。
「尤も、名前の振り分けはピッタリだと思うけどね…」
言いかけたラグエルが突然ソフィアの肩を掴んだ。
「なっ…！」
息を詰まらせる彼女を押し倒して、一緒に地面へと倒れこむ。苦

情を言いかけた彼女だが、そのまま声を呑みこんだ。
轟音が響く。その中で、奇妙な赤ん坊の泣き声が混じっていた。
風化したコンクリートを更に砕いたのは、鳥を模した異形だった。羽毛の揃った翼に、長いくちばし、鋭い鉤爪は鳥そのものだが、その頭には未発達な赤ん坊の上半身がついている。赤ん坊は盛んに泣き叫ぶが、その顔についているのは口と大きな一つ目だ。反して体長三メートルはあろうかという巨体は、大人一人丸呑みにしてしまいそうなくちばしを大きく開けている。
ばさりと羽ばたくのは二匹。
廃墟に足をかけてこちらを覗きこんでいる。
好奇心か。食欲か。人間の顔があるというのに表情はわからなかった。
「アンジェか」
ソフィアを庇ったラグエルが、舌打ち混じりに鳥と相対するアズラエルを顧みる。アズラエルはコートのポケットに手を突っ込んだまま、いつもの仏頂面で鳥を睨んでいた。
「呪いがかけられている。ラグエル、解けるか？」
ラグエルはソフィアをそのまま背中に庇って立つと、鳥を見ながら軽口を叩く。
「腹の足しにされる方が早いよ」
ソフィアは怯えた視線を彼の背中越しに鳥の頭頂部についた赤ん坊へ泳がせた。不気味な赤ん坊の額に、奇妙な赤い文様が印されている。不自然さを感じて、恐怖を忘れそうになった。
「……呪いって、あの額にある模様？」
尋ねた彼女を、男二人はひどく驚いた様子で振り返った。二人の反応にソフィアの方が驚いて、目を丸くする。
「な、何？」
だが、彼らは結局何も言わずに鳥へ向き直った。
鳥が大きく鳴く。
耳をつんざく声は淀んだ空気を切り裂いた。

文字通り八つ裂きにするための鉤爪をアズラエルに向かって突き出す。
アズラエルは体を反転させて必殺の爪を避けると、空振りした爪に足を掛けた。そのままジャンプ台にして飛び上がる。
くちばしがアズラエルのコートに喰らいつこうとするが、彼は開きかけるくちばしを上から踏みつけた。
飛び乗ったくちばしの上でポケットから手を引っ張り出すと、口を開けてもがく赤ん坊の額に向かって手の平を向ける。
何の変哲もない行為に、鳥は突然、大人しくなって廃墟の頂上に爪を下ろして止まった。
もう一匹は鳴き喚いて、真っ直ぐラグエルに向かって獲物を狙う鷹のように降下してきた。
ラグエルは飛び退こうとせず、両腕を突き出す。
赤ん坊が仰け反った。
空気が局所的に圧力を上げた。そうとしかいえないような現象だ。赤ん坊の叫び声に、鳥のけたたましい声が覆い被さる。
鳥がいる場所の空圧だけが震動し、空気と摩擦を起こした鳥の体から煙が上がる。全身を煙に包まれた鳥はようやく奇妙な空間から放り出されると、ぐったりとその場に力尽きた。
赤ん坊の額から赤い文様だけが消え失せている。
無力化した鳥たちを見とめてから、ラグエルはソフィアに手を差し出した。
「大丈夫？」
彼女は素直に手を取った。腰が抜けて何か支えがなければ立てない状態だったのだ。
「……何とか」
立ち上がってスカートをはたいていると、アズラエルは不気味な鳥のくちばしの頭を一撫でして降りてくる。
「よくあんなモンに触れるよな」
ソフィアも浮かんだ感想を、ラグエルが代弁してくれた。アズラ

エルは無愛想に横目で鳥を見遣る。
「別に。さっき蹴り飛ばしたから謝っただけだ」
「やっぱり変わってるよ。お前」
アズラエルはそれ以上話題には触れず、ソフィアに視線を降ろした。
「怪我は？」
「……無いわ」
ソフィアは少し眉を歪めた。高圧的でさえある言葉だが、不思議と不快感のない平板な口調にどういう表情を返せば良いのか迷うのだ。
ソフィアの返答を確認すると、アズラエルはさっさと踵を返して十五分前と同じように歩き出す。
ソフィアはラグエルと顔を見合わせたが、彼は呆れたように口の端を吊り上げた。
「不器用なんだ。許してやってよ」

6

廃墟の真ん中に、階段はあった。
螺旋に伸びた古い金属の階段は、段と段の間に隙間があり、隙間から地上が見えるという高所恐怖症に最も嫌われる造りだ。
五階分も登れば、落ちれば充分死ぬ高さである。
ソフィアは手すりの隙間から廃墟を覗き込んだ。
この階段、五階で終わっているのだ。
そしてドアの向こうに建物はない。階段だけが塔のように建っている。
空に見紛う天井は遥か先にあるが、目の前にはぽつんとドアがつけられている。古くもないが新しくもないドアの取っ手には看板が掛けられていた。
“占い師　ヘカテ　”
草花を模った縁取りの小さな可愛らしい看板は、この廃墟にひどく不似合いだった。
この五階からよくよく辺りを見渡せば、同じような階段が点在しているのが見えた。最長で二十階ほどの階段群が遠くに近くに、まるで墓標のように建ち並んでいる。建物だけが崩れ去り、その階段だけが残っているようにも見えた。
アズラエルがドアをノックする。
「どうぞ」
何もないはずの内側からくぐもった返事が帰ってきた。外から見る限り、ドアの向こう側は地上五階分の空間があるだけだ。
アズラエルは無造作にドアを開ける。足を踏み入れる彼を見送って、ソフィアは顔を引き攣らせてその場に居残った。だが、ラグエルに急かされて、結局ドアを潜る。
恐る恐る踏み出した彼女のローファーは床を踏みしめていた。目を丸くした彼女はラグエルに手を引かれるままドアの向こうへと進

む。
靴音が響いた。
三人分の靴音が複雑に反響している。
真っ暗な空間は神殿のように整然と静寂に満ちて、ただ正面に僅かばかり反抗的な光が灯っている。
光に向かって進めば、やがて小さな机と三人分の椅子が見えた。机上にある小さなランプが晧々と闇に反発しているのだ。
「いらっしゃい」
向かいに座しているのは、若い女だった。腰まで届く黒髪が魅惑的な服からはみ出している白い肩にかかる姿は娼婦を思わせるが、彼女の冴えた黒瞳が印象を払拭する。整った白皙の容姿に施された化粧は当然の如く彼女にあって、むしろ神秘的でさえある。
彼女は手元にある人の頭ほどの水晶球を弄びながら、金のマニキュアを乗せた長い爪の指を椅子に向けた。
「どうぞ。お久しぶりね」
囁かれれば甘い声だった。しかし、抑揚のない声は淡白にも聞こえた。
彼女に席を勧められても、アズラエルは腰掛けようとはしなかった。ただ、彼女を見下ろして冷淡に視線を下ろす。
「仕事だ」
応えはわかっていたのか、彼女は紅唇の端を押し上げた。
「ラグエルもお久しぶり」
「ヘカテ姐さん。おしゃべりはまた今度ね」
アズラエルほどではないが、ラグエルまであしらいは冷たい。不思議に思って彼らを見比べるが、二人とも何処か緊張した面持ちだった。
「そう邪険にしないで。ソフィアも不思議がっているわ」
ヘカテは鈴を転がすように笑うと、それ以上は勧誘せず水晶玉に両手を乗せる。
「運命にはいつも三つの道がある。それは枝分かれして無数の道と

なり、全方位を埋め尽くす」
　ランプが声に震えるように身震いした。
「運命は一つではないの。幾つもの可能性と偶然が重なって初めて事象となる。だから、それは世界の秘密。秘密を暴く役割を与えられた私を怖がるのは無理もない話なのよ」
　ヘカテは黒い瞳を少し伏せる。
「闇に綺麗な緑の光があるわ。それは私と同じく世界の秘密を暴く物。ただ、誰も扱えたことのない道具。生贄も懇願も、何一つ受け入れない完璧な道具。完全無比の機密性で書かれた文書を解読しなければ、目覚めることのない道具。これに悪戯をしかけている者がいるわ。恐れを知らない可哀想な子羊。憐れな彼は運命を知らない。高い木から落ちて死ぬ運命を」
　水晶に映る彼女の瞳がランプを反射して黄金の眼光を宿す。アズラエルは水晶玉に向かって言葉を落した。
「何処へ行けば運命を教えてやれる？」
「ここから南西へ。案内人が居るわ。それより、アズラエル」
　ヘカテは水晶から顔を上げると、三人を見上げて媚態を作るように机に肘をつき、頬を手の平に乗せた。
「ソフィアに話はしたの？」
「彼女は知る必要がない」
「それはソフィアが決めることであって、アズラエルが決めることではないわ。言ったはずよ。道はいつも三つある、と」
　急に視線を向けられて、ソフィアは少し息を呑んだ。
　何もかも吸い込んでいくヘカテの黒瞳が弓形に細くなった。
「ここへ来る途中、空を見た？　ここは空のない世界よ。世界は三つある。運命と同じようにね。空のない世界、空ばかりの世界、空と海のある世界。それぞれ、ソドム、ヘブン、アース。世界に優劣はないわ。互いに干渉し、互いにせめぎあう一つの世界でもあるの。一つであって、一つではないもの。ソフィア、貴女はアースの住人。空と海に挟まれている人だから人間というの」

「……じゃぁ、あなた達は人間ではないの？」
ソフィアはあとずさった。ヘカテの口ぶりでは、彼女達は人間ではないということになる。
ソフィアの怯えがわかっているはずだが、ヘカテは口元に薄く笑みを刻む。
「そう。人ではあるけれど、ソフィアと同じ人間ではない存在だわ。でも私も、アズラエルやラグエルも人であるし、人以外でもないの。優劣はないのよ。つけたがる人は大勢いるけれど、評価が正しく下されたことは未だかつてないわ」
彼女の黒瞳がソフィアを捉える。

意識が、吸い込まれる。

ソフィアの腕が引かれた。見上げるとラグエルが彼女の腕を軽く掴んでいた。
「ありがとう、姐さん。俺たち仕事に行くよ」
ヘカテは引きとめようとも追い払おうともせず、ただジッとソフィアを凝視している。
それを返答と取ったのか、ラグエルとアズラエルは踵を返す。
「隠し事は良いことだわ」
つられるように彼らについて歩き出したソフィアはふいにヘカテを振り返った。彼女は妖艶ともいえる笑みを浮かべた。
「でもね。他人にすぐ分かってしまう隠し事ほど、虚しく愚鈍な行為はないわ」
ヘカテはすう、と金色の指先をソフィアに向ける。
「その目」
ソフィアは顔を上げた。怯えてその瞳が見開かれる。
彼女は、次の言葉を唐突に理解した。
「その目は隠しても無駄よ。――その綺麗な緑色はね」

7

朝、学校へ行くと真っ先に浴びせられるのは、朝日ではなく、嘲笑だった。
最初は翠の瞳。
次にこの頑なな性格。
その次からは理由が判然としない。
自分も応えられない。
誰も応えられない。
困惑。
焦燥。
混沌とした渦はどこか、この世界に似ている。
「父親がイギリスの人でね。眼が緑色なの。髪は日本人の母親譲りだけど」
みつあみにした髪はそれを特徴とするためだけに伸ばした。腰まで届こうかという髪はそれだけで人の印象を固定する。
「面白いように苛められたわ。黒髪に緑の目っていうのは子供だけじゃなくて、大人も嫌がって」
視力が悪くないのに眼鏡をかけているのは少しでも自分の目を隠すため。
「いっそのこと髪を金髪にしてやろうかと思ったんだけど」
両親はカラスのような黒髪をとても褒めた。母の髪は黒髪であっても少し茶色がかっていて、父の髪はブロンドだった。
その黒い髪がとても美しいと、とても褒めてくれた。
「――結局、染めるのやめたんだ」
隣を歩く、万国共通に指示を受けそうな端正な容貌の男はにっこりと微笑んだ。
「やめて良かった。髪、とても綺麗だよ」
卒倒しそうな甘い声で囁かれるが、ソフィアは悪霊でも払うよう

に制服の肩を払った。
今、ローファーが踏みしめているのは瓦礫の街ではなく、緑の匂いが濃い森の中である。
年かさな木々が辛うじて開けた道を睥睨して、薄暗い道の先を不透明にする。
女占い師の指した先へと暗闇の中から出ると、この静寂の森に放り出されたのである。
異形の世界、ソドムに落ちてから休むことなく歩きつづけてすでに半日は経っただろうか。
「俺、髪はハニーブラウンだから、ブルネットには憧れがあるんだよねぇ」
ソフィアの反応にもめげることなく、美貌の男は色素の薄い髪を指で弾いた。
空のないこの世界には木漏れ日などなく、ただ周囲を確認できるほどの光が淡くあるだけだが、彼の髪はわずかな光も反射する。
「アズラエルもいいよなぁ。ブルネット」
前を歩いていた長身で黒髪の男は、応えを返さずただ溜息をついた。
ある意味で、ソフィアとこのアズラエルという男は似ていると言ってもよかった。
ソフィアはその黒髪に似合わない緑の瞳。
「案内人はまだ見つからないの？」
ソフィアの問いに、アズラエルは素直に振り返った。
黒フレーム眼鏡の奥の双眸が放つのは紅玉の光。尋常な人では持ち得ない瞳の色だ。
その眼を疲れたように少し細めて、彼は口を開いた。
「――――そうだな」
ヘカテは案内人がいると教えたのだ。それがすでに何キロも歩いたはずだが、いっこうに現れない。
「もうこんなトンネル歩くのヤになってきたんだけど」

ソフィアは驚いて隣をのんびりと歩く美形を見上げる。その様子に男は形の良い眉を驚いたようにあげてみせた。
「何言ってるの？　ここは森じゃない！」
今、三人が歩いているのは、不気味な鳥の声こそ聞こえないが、いつファンタジックな魔物が出てきてもおかしくないほどの深い森だ。
だが、
「え？」
と閑麗な男は声を漏らして、首を傾げる。
「今、俺が歩いてるのは、暗いトンネルだよ。ほら、ちょうど地下鉄のトンネルみたいな」
声も反響して聞こえる、と彼はヤマビコを呼ぶように手でメガホンを作ってさえ見せる。
「ちなみに、俺には君が今、別人に見えてる」
「はぁ？」
「うん。わかってる。君は“ソフィア”だ。でもね、今は“君”が俺のよく知ってる人物に見えるんだ」
「つまり……こうして喋っている“私”が、別の人が喋っているように見えてるってこと？」
「そう。“君”の言葉なのに、別の人物が俺に話しかけてきている」
「……じゃぁ、アズラエルも？」
前を歩く黒髪の長身は普段と変わらないように見える。
「多分。――――姐さんも厄介なところに俺たちを放り込んでくれたもんだ」
「……仕方がないだろう。ラグエル」
アズラエルは振り返り、溜息をつく。その様子にソフィアの隣で男は美貌を歪めた。
「そんな疲れた顔して言っても説得力ないって。全然、大丈夫じゃないんだろ」

確かに眼鏡の奥にある紅い眼光が少し鈍って見えた。
「――そんな顔をするな」
不意にアズエルは眉を歪めた。
困ったような、怒ったような、
「……貴方も私が別の人に見えているのね」
泣きそうな。
ソフィアの言葉で、アズラエルは弾かれるように顔をあげ、眉間にシワを深く刻む。
「――本当に悪趣味ね」
ソフィアはアズラエルから視線を外し、延々と続く森を見つめる。
「おいらにとっちゃ、ここは唯一無二の住み処なんだけどねぇ」
降って沸いた声は、ちょうどソフィアの右手から聞こえた。
見遣れば、道の脇に沿って並ぶ小さな土手の上に子供が座っている。
子供らしい半ズボン姿だが、巻頭衣で腰に荒縄を巻きつけたそれは古今を入り混ぜた奇妙な姿である。
だが、何よりも目を引くには子供の額にある眼だった。双眼と加えてもう一つ、額に開くその碧眼は子供の双眸と同じように瞬く。
少し眼を見開いたソフィアだったが、すぐに
「貴方は？」
問い返した彼女を見て、今度は子供が眼を丸くした。
「おいらはキュクロプス。ここに住んでる――そうだな…」
子供は手慣れた様子で土手を飛び降りると、ソフィアの前に立って彼女を見上げる。
「しがない案内人だよ。この真実の森のね」
子供、キュクロプスはすっと右手を差し出した。
「よろしく。緑の目のお姉ちゃん。ヘカテに導かれてきたんだろう？」
「ヘカテ……さんを知ってるの？」
キュクロプスはソフィアの右手を握って、笑う。

「あの性悪占い師。こんな森に素人を寄越すなんて何を考えているんだろうね」
「素人？」
「そうさ。……そこのお兄ちゃん達。一度、きつく眼を閉じてごらん。次に眼を開いた時にはちゃんとこの森に居るはずだよ」
子供に言われて、半信半疑のままアズラエルとラグエルは眼を閉じる。そして次に瞬いたあと、驚いたように眼を丸くした。
「……うわ。こんなところ歩いてたんだ」
ラグエルは軽口を叩きながら、頭を掻く。
「な？」
子供はまだ茫然とする三人に向かってニカッと笑うと、暗い道を歩き始めた。
「さ、行こう。出口はまだ少し遠いから」
小さな案内人に導かれ、ソフィアはまた森に踏み出した。
「どうして、三人とも違う道に見えていたの？」
「お姉ちゃん、人間だろ？　人間なんて滅多にこないんだけど、どういうわけだい？」
質問を問い返されて、ソフィアは押し黙る。その様子に肩を竦めて、キュクロプスは頷いた。
「違う道なんかじゃないさ。みんな、それが自分にとっての本当の道だったんだ。それを、おいらがこの世界にある真実の森に案内した。それだけのことさ。だから、誰も間違った道なんて歩いちゃいないよ」
でもな、と子供はソフィアを見遣る。
「お姉ちゃんは別だ。お姉ちゃんは、おいらが住んでるこの真実の森を見ていた」
「どういうこと？」
「お姉ちゃんは他人の道を見ることができたからさ。なんたって、その眼を持っているんだから」
「……私の目はただの緑の眼よ」

「違うね」
キュクロプスは自分の額の眼を指差す。
「碧眼とは違う、緑色の眼ってのは特別な意味があるんだ。だからヘカテがここに寄越したんだろうけど」
「キュクロプスっていうのは名前じゃないでしょ」
ソフィアたちの会話に割って入ったのは、ラグエルだった。
「一つ目の巨人がこんな小さな小人になったとはね」
子供を覗き込んで、ラグエルは首を傾げる。
「おいらにも事情があるんだよ。名前は勘弁しておくれ。名が持つ意味はアンタ達の方がよく知ってるだろう」
キュクロプスは細い指で頭を掻いた。
「そういえば、どうして名前が意味を持っているの？」
ラグエルは質問したソフィアに振り向く。
「名前というのはね、いわば命に刻み付けられた識別番号みたいなものなんだよ。ソフィアの住んでいた世界じゃ知らないけど、少なくともここでは、名前を知れば相手を殺すことだってできる」
ソフィアは思わず顔をしかめた。だが、ラグエルは普段通りの笑顔で続ける。
「方法はたくさんあるけれど、名前を知ることイコール生殺与奪を握ったも同然なんだ。それなのに、軽々しく本当の名前を他人に教えるなんてできないだろう？　だから、そのために君にはソフィアって名前があるんだ」
「じゃ、ラグエルやアズラエルの本当の名前じゃないのね」
ラグエルはにっこりと微笑んだ。
「そのとおり。やっぱりソフィアは飲み込みが早いね」
「関係ないことを喋るな」
キュクロプス、ソフィア、ラグエルの後ろを歩いていたアズラエルが重苦しい声を挟んだ。
「だって、知らなきゃならないことでしょ？」
ラグエルは宥めるように笑うが、アズラエルは無表情にソフィア

を見遣る。
「今、聞いたことは忘れていい」
ソフィアは口を歪めて、息を呑んだ。
「忘れていいって言われても、もう聞いちゃったんだから忘れられないわよ」
彼女の様子に、アズラエルは深く溜息をつく。
「……余計な質問をするからだ」
「言っておくけど」
ソフィアはアズラエルを下から睨みつけた。
「私は被害者。貴方達は加害者。立場をわかってくれる？」
自分とアズラエルを交互に指差し、ソフィアはアズラエルの胸をトンとついた。
たったそれだけの仕草。
その瞬間、ソフィアの視界は一転した。

8

まばたきの瞬間さえなかったのかもしれない。
半瞬後の世界は、右半分が欠けていた。
左半分の視界にまず広がったのは、一面の空。
その深い蒼さは、宇宙から見えるという地球の蒼さにそっくりだった。
何者の飲み込む絶対的な蒼の光景がそこにあった。
浮かぶ雲はその蒼にわずかな抵抗を示すベトコンのように辛うじて支配を覆す。
長い回廊だった。
だが、足元の床面はガラスのように透き通り、その先はどこまでも空しか見えなかった。
地上のない空間に、この回廊は浮かんでいるのだ。
磨かれたガラス造りであるのは床だけではない。
等間隔に置かれた柱も複雑な光を反射する透明なガラスで出来ている。
ともすれば、水晶の回廊に見えた。
水晶のタイル張りの床は歩けば澄んだ音をたてた。
「ソフィア？」
呼ばれて顔を上げると、そこには見知らぬ男がいた。
長いブロンドに縁取られた姿は西洋画に見られる聖人を思わせた。
柔和に笑みを浮かべる姿は女性的ですらあるが、男性だと結論付けたのは肩から腹まで引き裂かれた服を着ていたからだった。
元は純白のきっちりとした詰襟の服だったのだろう。だが今は肩口から引き裂かれ、汚れている。
純白を汚すのは暗い赤の色だった。
肩から流れ落ちる赤は腕を伝って水晶の床へ点々と水溜りを作っている。

「どうしたの？　ソフィア」
優雅とさえいえる男の笑みは、どこまでも澄んでいた。だが、それだからこそ、子供じみた純粋さが悪意にさえ見えた。
不気味さを覚えて身を引くと、腕をとられた。
「ソフィア！」
顔をあげると、見慣れた長身がこちらを見下ろしている。
驚きを隠せない仏頂面は、紅玉の瞳を湛えている。アズラエルだ。
しかし、いつもの眼鏡はなく、非常な瞳は幼く見えた。
きつく腕を取られた拍子に、抵抗すると軽く戒めは剥がれた。
床にもがく足音と、紅い滴が飛んだ。
うつむいた顔を、艶やかな床面がとらえる。
ダークブラウンの長い髪だった。
軽くウェーブのかかった髪は美しく、白皙の肌をひきたてている。
身に付けているのは純白のドレス。
花嫁のような姿には、似合わない赤の化粧が施されていた。
毎朝、鏡で見る制服におさげ髪ではない。
手を見遣れば、握られているのは鞄ではなく武骨な両手剣である。
鏡に映る人物が別人であることは一目瞭然だ。
硬く引き結ばれた紅唇、意思の強そうな瞳は左だけ。
何の因果か、瞳の色は新緑が留まっている。
左の瞳だけ。
右の瞳が何色だったのかは、もうわからない。
顔の右半分からは毒々しい赤が滴り落ちている。
頭の先から見て右半分は、頬の部分にかけて欠けている。
抉り取られたように。
砕かれた頭蓋骨が見える。
膨れた血管が見える。
断ち切れた脳組織が見える。
脳に到達した血液はその役割を果たせないまま、右から流れていく。

声をあげた。
辛うじて残っている声帯が最期の一滴まで搾り出すように甲高く震える。
床面に映った、化け物じみた顔も一緒に悲鳴をあげる。
我を忘れて、かつてはあったはずの顔の右半分をかきむしり、白い手を血で汚す。
そのたびに透明の床は無粋な水滴で汚染された。
誰かが誰かの名前を呼んでいる。
だが、その声に応えることもできず、震え出した足は体を支えきれずに座り込む。
床に手をつき、否応無く床面の顔と対面し、眼を閉じようと目蓋を動かすが、禍々しい翠の瞳は視線を真っ直ぐこちらに向かう。
貫くような眼光は、物問いたげに揺らめいた。
「ソフィア！」
子供の声が床面の瞳を打ち壊す。
瞬きすると同時に、深い森が一瞬視界に入った。
しかし、瞬きするには目蓋は予想以上に重く、再び視界は暗闇に閉ざされていった。

9

冷たい。
その感触が、まどろみを引き剥がす。
頭痛をこらえて、歩美は起き上がるが夢と現実の交錯で眠気のような混乱が感覚を鈍らせていた。
次第に体は夢から目覚めたが、まだ目を閉じているような暗闇に戸惑った。
この暗闇に、いくつかの靴音が反響した。それでようやく彼女は、明りのない広い空間に放り出されていると確認する。
急に視界が開けた。
ランプの明りに照らされたのだ。浮かび上がったのは一つ目の子供と、何処か中国にでもありそうな袷(あわせ)の民族衣装を着た二人の男だった。彼等はいずれも剣帯に大小の剣を吊るしている。
そして、三人と歩美との間には騙し絵のような鉄格子が隔たっていた。
「ソフィア」
一つ目の子供に呼びかけられて、まだ起き抜けの脳裏に緩い記憶が閃いた。
今は歩美ではなかったのだ。名前が人を殺す力さえも持つというこの異世界では仮の名前が必要だった。
「……キュクロプス。これはどういうこと?」
冷たい石の床が濡れていることに気がついて、歩美、ソフィアは一つ目の子供、キュクロプスを見つめながら腰を浮かした。
制服のスカートの裾に触れると、わずかに湿っている。この牢に放り込まれて数時間以上は経つらしい。
キュクロプスはソフィアを宥めるように肩を竦めた。
「おいらも困ってるんだよ。ソフィアが倒れてからすぐに真実の森を抜けたんだけど、行くアテがないもんだから、あのデュナミス達

に頼ってここまで来たら…」
「デュナミス？」
「アズラエルとラグエルみたいな空と地中を行き来する連中のことさ」
黒髪のアズラエルと茶髪のラグエルを思い出して、ソフィアは少し顔を歪める。
「さぁ、話はあとだ」
会話に水を指したのは、ランプを持った男だった。
「言葉がわかるならそこから出ろ。御前に連れて行く」
牢を開けられ、ソフィアは素直に外へ出る。牢の中とは違い、乾いた床を踏んで改めて自分のローファが湿っていることに眉をひそめた。
「御前？　誰に会わせようっていうの？」
「口の利き方に気をつけろ」
男二人に挟まれる形で、薄暗い石の廊下を歩き始めた。
「姫さ。この国の。まぁ、姫といっても女王といってもいいね」
ソフィアの隣で同じように足を進めるキュクロプスが子供の無邪気な声で陽気に語り始めた。
「何でも絶対の権力を持ってるらしくね。ソドムでの発言力も大きいものだから、たとえデュナミスといえども彼女のワガママにはなかなか逆らえない」
やがて長い階段を登り始める。
「デュナミス……って。ラグエルとアズラエルは何者なの？」
「彼等は天上に住む監視者さ。空ばかりしかないヘヴンからアース、ソドムを統治するための派遣監査官ともいえるな」
「……監視？」
「そう。監視」
キュクロプスはくるりと一指し指を回す。
「奴らはとにかく公平が好きなんだ」
わけのわからない説明をされて、とりあえずソフィアは質問をや

めた。
そろそろ階段も切れる。
男――兵士なのだろうか――の一人がようやく見えた重い扉を開いた。
有無を言わさず促され、通されたのは明るい廊下だった。日の光をふんだんに取り込むのは高い朱色の柱が居並ぶ回廊である。床や天井に刻み込まれた幾何学模様が陽光に慣れない目をいっそう刺激する。
甲高い靴音は気の遠くなるほど高い天井に跳ね返り、複雑に反射した。
同じような回廊をいくつも進み、辿り着いたのは一際広い部屋だった。左右に天幕がいくつも並び、その先に人が小さく見える座席が一つ設けられている。その周りに幾つか人の姿が見えるが、いくら目が悪くないとはいえ、影が見えるにとどまる。もはや、部屋と呼ぶには広すぎた。
何せソフィアが止められたのは部屋の一番端なのである。いつのまにか眼鏡もはぎとられているので視界は広く、眺めだけは良い。
ぼんやりと眺めていると隣の兵士に小突かれた。
「早くお答えしろ」
「は？」
最奥の席に腰掛ける人物が何かを喋ったらしいが、ソフィアにそれが聞こえるはずもない。
「お前が緑の目の持ち主かい？　ってさ」
代わりにキュクロプスが教えてくれる。彼の大きな一つ目でなら、この非常識な距離も処理できるようだ。
「質問の意味がわからないわ」
「言っただろ。ソフィアの目は特別なんだってさ」
キュクロプスはいつもの陽気さを収めて神妙にソフィアを見上げてくる。
「どう特別なの？　ただの碧眼よ？」

「だから…」
「歩け」
話の途中で二人は兵士達に押し出される。
「何？」
「御前まで召し上げろとおっしゃった」
そのまま兵士はソフィアの背中を強引に押し、広い部屋の中心を歩かせた。
歩を進めるに従って、ようやく彼等の言う“御前”が見えてきた。大きな天蓋の下に一人の少女が座っている。高く結い上げた黒髪に、細い首で支えきれるのかと思うほどの貴金属をつけ、その首にも大きな宝石をいくつもつけている。衣装こそ見慣れない袷の民族衣装だが、長い裾を椅子の数メートル下に流している姿は何処かの肖像画に登場するような姫君だった。
その近くに見慣れた長身の男達を見つけて、ソフィアは思わず睨みつけた。
端正な小顔をこちらに向けて手を振る茶髪はラグエル、そして振り向きもしない黒髪がアズラエルだ。
再び止められたのは、この二人から少し離れた場所だった。
「———ほう。とんだ小娘じゃな」
物珍しそうに言ったのは姫君である。
ソフィアが向き直ると彼女は長いまつげに彩られた瞳を少し歪めた。
「その、瞳じゃな。問題の瞳は」
長い人差し指の爪先が指すのはソフィアの碧眼である。
「それが一体———」
「そうです」
疑問で噛み付こうとしたソフィアを遮って、硬く応えたのはアズラエルだった。横目で睨むが黒フレームの眼鏡が見えるだけで表情の揺らぎはない。
「厄介なものが来たものじゃ。——言うておくが、わらわは貴様ら、

デュナミスも好きではない」
ソフィアから視線を移した姫君はアズラエル達に嘲笑を向けた。
「元より貴様らヘブンの住人は秩序を求めるくせに、己の平安さえおぼつかぬ。それが我等ソドムを統治しようと言うのだから皮肉なことよの」
ふ、と笑い、姫君は訳がわからないと顔をしかめるソフィアに水を向ける。
「アースからの異邦人よ。そなた、あやつ等の姿を観たのであろ？」
観た、と言われてソフィアは脳裏に焼きつく光景を思い出していた。真実の森で観た幻覚である。血に濡れる男、血の色の目を持つ若いアズラエル、そして顔を抉られた女。
（あれが、アズラエルの見ていた真実の道なら……）
あの凄惨な姿が彼の現実なのだ。
美しいガラスの回廊が酷く虚しい憎悪を飲み込む世界。
「あやつ等はの。己の権力闘争に余念がない奴らなのじゃ。常に恐怖で秩序を求め、それでしか他人を動かすことができぬ。我等ソドムは秩序がない分、干渉は　ない。むしろ我が世界の方が平和というものじゃな」
姫君はころころと鈴のように笑う。一見、無邪気にも見えるが、ソフィアにはそれが魔女めいて不気味に映った。
「じゃが挙句のはて、奴等はデュナミス共を使ってソドムにまで己の戦乱の種を蒔こうとしておる」
笑う姫君の瞳が刃物のようにうっすらと光る。
「それはアンタも同じじゃない？」
からかうように口を挟んだのはキュクロプスである。
「ソドムでは有名だよ。ギの国の魔女姫。アンタ、デュナミスにちょっかいかけて、ヘブンに戦争でも挑むつもりかい？」
子供特有の甲高い笑い声が広間に響いた。しばらく耳を傾けていた姫君だったが、おもむろにアズラエルとラグエルに視線を向けた。
「デュナミスのアズラエルと言ったな」

「は…」
低く頷いたアズラエルは少し口元を硬くする。
「殺せ」
姫君が何気なく自分の首に一指し指をあてた。
「そこのキュクロプスを殺してみせよ」
「……何故」
「キュクロプス」
問うアズラエルを黙殺し、姫君はキュクロプスに笑いかける。
「ぬし、わらわに向かってよう言うた。そうじゃな。ヘブンに楯突くのもそろそろ良いだろう。しかし今はラファエルがおるからの。あやつがくたばるのを気長に待つことにするわ」
姫君は目を細めた。
「キュクロプス。ぬしは失うたあと（・・）二つ（・・）の（・）目を取り戻し、本来の姿になってからわらわの元に来るがよい。職の一つも与えてやろうぞ」
対したキュクロプスはいつもの軽口を収めて、苦笑を漏らした。
「アズラエル。そやつの首をはねよ」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
ソフィアは思わずキュクロプスの前に立った。
「首をはねたら死ぬに決まってるでしょ？　気に入ったくせに何で殺すのよ！」
「キュクロプスはこの世界の者ではない」
姫君は冷笑を湛えてソフィアを見下ろす。
「異世界の者はこの世界で死ぬことはないらしい。たとえ首をはねてもな。それにそのキュクロプスは本当の体を無くしておるから死にたくとも死ねぬのじゃよ」
「じゃぁ首をはねるなんて意味がないじゃない！」
「意味はある。この場にこやつは邪魔なのじゃ」
「邪魔？」
「次に首を落とすのは、そちじゃからの。これ以上邪魔をされぬよ

う首をはねておく」
ソフィアは絶句した。
体を跳ね飛ばされる。
誰かと見遣れば、ラグエルである。
「ごめんね。ソフィア」
茶髪の美貌は軽薄にニコリと笑いかけてくるが、今まで感じたこともない悪寒がソフィアの背中に走った。
その隙に乗じてアズラエルがキュクロプスの首めがけて平手を刀のように振り下ろす。
「あ」
間の抜けた声を上げた。
キュクロプスは静かな笑顔を湛えたまま跳ね上がる。
生温かい飛沫が飛び散った。
ごとん、と重い音が響いた。
息ができない。
口を開けたまま閉じることもできない。
頬をかきむしる指先が冷たい。
そのくせ動悸は熱に浮かされたように痙攣している。
視線は離れなかった。
床に落ちる小さな体。
その先の、笑みを湛えた一つ目の子供の首。
血は赤くはなかった。真っ青なスカイブルーである。
生理的な嫌悪感と恐怖がソフィアの言葉を更に奪う。
靴音が聞こえた。
ゆっくりと、だが確実に近づいてくる足音にソフィアは茫然と顔を上げる。
無情な紅い双眸が黒フレームの中から彼女を見下ろしている。
アズラエルはソフィアを見下ろしたまま、何かを静かに告げている。
「逃げろ」

小さく、聞き取れないほどの掠れた声で、アズラエルの声が聞こえた。
彼の青に染まった平手がさながら首切り包丁のように振り上げられる。
「逃げろ！」
ソフィアは意識のないまま走り出した。
だが、おさげの先をアズラエルが掴む。
振り返るとラグエルの驚いた顔を見えた。
「アズラエル！」
手を放せ、と口で伝えるラグエルを無視して、アズラエルはソフィアのおさげの先を掴んだまま冷たく彼女を見据えた。
ようやく氷解した涙腺が緩む。
「私もあの人と同じように殺すつもりなのね！」
アズラエルの手から少し力が抜けた。震えたのだ。
ソフィアは構わず彼の手を払いのける。
毛先の留めをむしられて、長い黒髪がほどけていく。
そして、誰の制止も聞かずに走り出した。

10

おさまらない息切れを噛み殺し、草むらで小さく固まっていた。
これでどうにか静かになるが、体を走り回る動悸だけは落ち着けようがなかった。
広間から逃げ出したものの、ソフィアは広い城の右も左もわかるはずがなく、しばらく走り回ったあげくに迷った。元からどこへ行きたいのかもわからないのである。とにかく逃げ回るうちに小さな庭園の草むらに身を潜めるはめになったのだ。
じっと息を殺して焦点の未だ定まらない思考は、先ほど見たアズラエルの悲痛に歪んだ顔に行き着いた。
私を殺すの、と口走った。
それは何故か確信めいていた。
真実の森の幻覚は、幻でありながら真実を写している。
アズラエルの幻に現れた、顔の半分抉られた女。彼女はアズラエルに殺されたのだ。
美しい長い髪の女は奇しくもソフィアと同じ翠の瞳だった。もっとも、彼女の瞳はソフィアの新緑よりも鮮やかで、ずっと澄んでいた。
彼女は何者も見透かすような翠の瞳でガラスの世界を見つめて二人の男を見守っていた。
一人は金髪の男、もう一人は紅い目のアズラエル。
彼女の瞳に映っていたアズラエルはまだ幼く、彼が女を見つめる目は苦痛に満ちていた――――。
ふ、と影ができた。
誰かが覗き込んだのだ。
震えで息が止まる。
「ソフィア」
囁いた声に聞き覚えがある。

見上げるとラグエルが草むらの側に立っていた。
「良かった。無事だね」
茶髪の貴公子は似合わない軽薄さで微笑んだ。
「……何がもう、どうなってるの？」
見慣れた気安さでソフィアは涙がにじんだ。だが必死に目頭をこすってラグエルを睨みつける。
「ごめんね。でもあの時はああするしかなかったんだ」
慰めるようにラグエルは声のトーンを落とした。
「牢に入れるのも？」
「森を出て、すぐに捕まってね。君の居場所がわからなかった」
兵士に見つからないようにか、ラグエルはこちらには向かわず明後日の方向を見たまま肩を竦める。
「よそ者には厳しい国なんだよ。治安はどこの国より良いからそのせいなんだろうけどね」
「――――これから、どうしたらいいの」
ソフィアは膝頭をきつく抱いて目を伏せた。
「とりあえずここから逃げるんだ。ここに居てもいずれ見つかる」
「……そうね」
「ああ。まだ立たないで。そのまま」
ラグエルはソフィアの方に手の平を向けた。
「君をこのまま市街に飛ばすから」
「飛ばす？」
「魔法みたいなものだよ。正確には移送転換魔術と呼ばれているけれど。出入り口はさっき作っておいたから市街の何処かに出る」
「それから？」
「そこからはちょっとサバイバルしてもらうしかないな。でも人の密集地だし、適当に観光でもしておいでよ」
気楽なものだ。呆れ顔で眉根を寄せるとラグエルは広い布を被せてきた。
「ちょっと…！」

「君の位置は上と連絡を取って教えてもらうから。大丈夫だよ。ちゃんと会える」

その声を最後に、ソフィアの視界は暗転した。

11

異界というのは、こういう場所をいうのだろうか。
奇妙な耳、爬虫類の首、両生類とも哺乳類ともつかない尻尾。そんな珍獣がイスラムとも中国風ともつかない衣装を着て街路を闊歩している。
「ちょいとお嬢ちゃん」
気前のいいおばさんの声に引かれて露店を覗くと、そこには肉を噛むために次々に生え替わるという鮫が顔をのぞかせていた。少し驚きながら店を眺めると色とりどりの果物が山と積まれて買い手を待っている。
鮫の顔をしたおばさんはよく働くグローブのような手でリンゴとも梨ともつかない黄色の果物をソフィアに差し出した。
「どうだい、旨そうだろう？」
瑞々しい果物は確か旨そうだ。だが、この世界の通貨を持っていないソフィアには手の出ないものだ。
ソフィアは、ウインドショッピングでよくやるように、おざなりに応えて店を出た。
ラグエルに城から追い出されて目を開けると、この街路より一筋外れた裏通りだった。茫然と立っているのも怪しまれるので、ソフィアは何食わぬ顔で表通りに出ることにした。
祭りかバザールなのか、人は多い。仮装している人もいて、ソフィアのブレザーは大して目立たない。
“適当に観光でもしておいで”
ここへソフィアを魔法で飛ばしたラグエルの言う通りにするのは癪だったが彼女は物見遊山で往来を見て回ることにした。青緑の奇妙な魚や黄緑の瓜、牙を向いた兎などは、食用というにはあまりに奇異で、ソフィアのいた摩天楼の通う都会とは違う賑わいが異邦人の心をくすぐったのだ。幾筋にものびる街路それぞれに露店が並び、

この国が長い平和で守られていることを示す。人々の顔はそれだけで穏やかだった。
しかし行く当てもないソフィアにとって、それはすぐ退屈に変わり、ひとり川縁で座り込む始末になった。
土手は草原で日当たりもいい。整備された川辺の風は心地よかった。
今までの動悸が嘘のようだ。
あの少年――――キュクロプスの首を斬られたことも。
ソフィアは記憶を引きはがそうと目を閉じる。
これは夢なのだ。
自分が作り出した夢の世界。
思い至って、はっと目が醒める。
どうして今まで気がつかなかったのだろう。
手を見つめる。
握っては開く。
感覚は確かにある。だが、疲労感はない。
あれだけ歩いて、走ってもう何日もそうしているというのに昏倒した以外眠くもならない。
夢だ。
だが、解かれた長い黒髪が痛む。
これは夢なのか。それとも
「アイツだ！」
思考の迷路から引きずり出される。
土手を見上げると城で見たことのある袷の兵服が数人こちらを指している。
逃げなくては。
そう思う頃にはソフィアは土手沿いを走り出している。兵達の帯元でかち合う剣の金属音が耳に響く。草を蹴散らし、必死に足を動かすが、滑り止めが薄くなったローファは草の上で滑って思うように走れない。

振り返るまでもなく、兵達が近いことが知れた。
足がとうとう滑る。
息を呑む。
意識が収縮する。
「あっ！」
やっとあげた声は間抜けに聞こえた。

12

一度、光を求めて瞬いた。
もう一度、同じように。
それを三度繰り返して、ソフィアはようやく目を開けた。
目の前に広がるのは、川辺に着くまで歩いていた露店の並ぶ街路である。
景色が動いているのはソフィアが自分で歩いているからだ。しかし、足に感覚はなく、意識だけが水平に移動しているようだった。
手を握られて歩いている。ソフィアを先導しているのは痩せぎすの男である。ありふれたワイシャツにジャケット、ありふれたチノパンを着込んでいる後ろ姿は人に見えた。
男の短髪は、銀を溶かし込んだような澄んだ銀髪だ。
「あの…」
声は思いの外普通に出た。男はおもむろにこちらへと振り返る。研究者然とした神経質そうな蒼の双眸で、少し笑った。
「気がついたね。良かった」
「———あの、私はいったい…」
瞬きする前までは、確かに兵士に追われていたのだ。
それが、逃げおおせたばかりか景色すら違う。
男もその質問を待っていたのか、心得たとばかりに頷いた。
「空間をね、少し移動したんだよ」
「……空間を？」
「そう。時間に少しだけ穴を開けてそこを潜ってきたんだ」
「……時間にトンネルを作ったってこと？」
「いい解答だね」
満足そうに頷くと、男は正面に向き直って急いでいるのかソフィアの手を引っ張った。
「これが、そのトンネルだよ」

言葉の先に、黒い、人一人が通れるような穴が街路に忽然と現れた。それは往来の人々すら壁とするように、あらゆる物をねじ曲げて出来たような、不自然な穴である。

尻込みしたソフィアの手を男はふいに二、三歩踏み出して足音高くトンネルへと入り込んだ。ひやりとした風が微かに頬を打つ。ソフィアはその風につられるように、男に続いてトンネルをくぐった。

瞬きを一つ。

その間に、トンネルは消えてしまい、ソフィアは男と二人、狭いドアの前に立っていた。

古びたドアに表札はなく、金属製か木製かはっきりしない戸は人が一人通れるほどの幅しかない。半地下の裏路地にあるらしく、昼間の日差しはあまり届かない。

男はその戸を開けると、ソフィアを中へと招き入れる。導かれるまま入ったそこは、誰かの書斎のようだ。

部屋に充満するのは積み上げられた本と紙、インクの臭いで、淡く入る日差しが渦を巻く埃を照らしている。だがこれだけ雑多に紙があるというのに本棚は一つも置かれていなかった。

「その辺りにかけて」

勧められたのは唯一書類のないソファだった。躊躇うように押し黙ると、男は少し笑った。

「そうだね。まず君の質問に答えていくことにしよう。何が聞きたい？」

そう言って、彼は愛用らしい机の前にある椅子をソファの前まで運び込んで腰掛ける。

「――――私を、どうして助けてくれたんですか？」

ソフィアはソファに座らず、玄関前で立ったまま男へ質問を投げた。

「僕が君を誘拐しようと思ったからさ」

男は椅子の肘掛けに肘を乗せ、頬杖をつく。

ソフィアは、はっとしてドアノブに手をかける。ガタンと大きな

音をたてるが、ドアは開かない。鍵らしいものは一切ついていないというのに、ドアはまるで外から閂でもかけたように耳障りな壁を作っている。
彼女が苛立って振り返ると、男は目を細めて口の端を上げた。
「とりあえず誘拐は成功したようだね」
「……私を誘拐してどうしようって言うの？　私に身代金を出してくれる人はいないわよ」
「期待していないよ。もしかしたら君と一緒にここへきたヘブンのデュナミス達が払ってくれるのかもしれないけれど、僕は君さえいればいいから」
「……どういうこと？」
「君は金にも勝る至宝ということだよ。碧眼のお姫様」
「――わからないわ。この目がどんな意味を持つというの」
この翠の目のせいで殺されそうになっている。キュクロプスは真実を見る目だと言った。しかし、視界に真実以外の何が目に入るというのだろうか。
「君のエメラルドグリーンの瞳は特別だよ。真実だけを見つめ、見通す目だ」
それはね、と男は蒼の目を閉じた。
「見ようと思えば世界の裏側だって見える目さ。何にも惑わされず、何にも騙されない」
「……誘拐されたわ」
「それは君が目を閉じているからだろう」
「……？」
「――目は閉じられたまま、現実を見ない、か…」
男は呟き、ソフィアを見遣る。
「君にその気があるなら、君が知りたいことを教えてあげよう。どうだい？」
ラグエルが探しているのかもしれない。だがソフィアを殺そうとしたのはアズラエルだ。

黙り込んだソフィアを眺めて、男は頷く。
「ここに居る間、考えるといい。質問も自由だよ。どのみち君を逃がす気はないから」
彼は椅子から立ち上がると部屋の奥にあるドアを開ける。暗がりの部屋の奥は昼間でも見えない。
「ああ、そうだ」
暗い部屋へと向けた足を少し止めて、男はソフィアを顧みる。
「僕はゲイリー。気が向いたら君の名前も聞かせて」
ソフィアは言うべきか否か迷って黙るが、ゲイリーは構わず続けた。
「これから本屋に行くからついておいで」

13

灰色のくちばしの上には丸い眼鏡が乗っている。眼鏡と同じように丸い赤茶の目は手元の本に落とされている。

「良い本は入りましたか」

ゲイリーが店主に呼びかける。こちらも棚を見つめたまま目を離さない。

「五段目の千二百番棚に新しい本がある」

店主はハシバミ色の羽根に覆われた丸い顔を向けもせずに応えた。人と同じ大きさのミミズクである。彼はカウンターに居座ってじっと本を読み耽っている。

「そこのお嬢さん」

低い声に呼びかけられて、ソフィアは少し息を呑む。

「アンタは十段目の五千百五十一番棚の本がいい」

「はぁ…ありがとう」

一応、礼を言ってソフィアは本棚が林立する薄暗い書庫へと向かう。

空気は静謐、人より本にとって快適な常温が保たれている。

「決まったかい？」

ゲイリーが五番目の棚から目当ての本を見つけたようだ。

ソフィアも言われた通り、十番目の棚から薦められた本を取った。革張りの装丁で金属でも入っているのか固くて重い。しかし取ったはいいが、字は虫がはい回ったようで、まるでわからない。

そういえばなぜ会話ができるのだろうか。

ゲイリーは自分に本を渡すよう言うと、幾らかの金を払ってソフィアを連れて店を出た。

川の支流のように幾筋も流れている街路の一角に本屋はある。外観はこじんまりとしてウィンドウすらないが、中は先ほど見たように果てしないのではないかと思うほど本棚が並んでいる。

石畳の街路へと出て、ゲイリーについて歩き出す。
ここは先ほど通った露店の並ぶ道とは違い、本屋のような静かな店が続いている。人通りもあまり多くなく、広い道幅では少なく見えた。
「……どうして私は、あなたと会話ができるのかしら」
会話はくまなく聞き取れるが、字は一向にわからない。
「まだ慣れていないからだね。その目の使い方に」
ゲイリーの家はここからほど近い。あと二間行けば半地下の街路に着くだろうか。
「君の目は調整が難しい。そのうち慣れてくる」
「慣れるほど、ここに居座りたくないんだけど」
「ここの暮らしも慣れれば楽しいものだよ」
「……ゲイリーはここの世界の人なの？」
「そうだよ。君は違うね」
「――――へカテって人に、アースの住人だって…」
「彼女は有名な魔女だから。過去のみならず、未来さえその知己に蓄えられているというね」
「ゲイリー…さんも魔女、なの？」
「ゲイリーで結構。僕は魔術師だよ。世界の秘密を暴くのが仕事だね。魔女は世界を知る仕事」
「……世界の秘密？」
「どうして空がないのか、どうしてヘブンとアースと繋がっているのか。といったことを考えるんだ」
「ここ…ソドムには空がないって聞いたけど、どういうことなの？」
この街の空の部分は木々が根を巡らせ、葉が青々と茂っている。
「本来ならここは全て暗闇の世界なのさ。でもここは明るいだろう？」
ほら、とゲイリーは遠い天井を指差した。木々の隙間に白く輝いて見える球体が埋め込まれている。
「あれがこの国で作られた人工発光器。この国の発展を支えている」

「夜と昼と調節できるのね」
「いいや。ここは昼ばかりだから一日中発光器が灯っているよ」
「夜がないの？」
「時間としてはあるね。因みに今は真夜中だろう」
ゲイリーは自分の腕時計に視線を落とす。時計の針は、逆回転に刻まれていた。
「眠らないの？」
「もちろん眠るよ。でも僕も君と同じように、食事も睡眠も必要ない」
「あなたはここの住人じゃないの？」
「元はヘブンから来たからね。移住者は五感を全て奪われる」
「じゃあどうして私も貴方も目が見えて耳が聞こえているのよ」
「それは元々持っているからだよ。でもソドムに生まれたわけじゃないから、ソドムでの五感はない。そういうことだよ」
「どういうこと？」
「つまりね、ヘブンから持ち込んだ目では、ソドムでは本当は見えていないということなんだよ。今見えているのは干渉による錯覚でね。平たくいえば、ソドムの人達にとって、僕たちは幽霊みたいなものなんだ」
「幽霊！　じゃあ私は幽霊として、ソドムの人達と話しているの？」
「少し難しい話をするとね。ソドムでは死の概念がない。つまり死の認識がない。死ぬことで消滅するという感覚がないんだよ」
「死なないってこと？」
「いや。人は必ず死ぬ。でも死人の世界と区別が曖昧だとしたら？」
「……地獄と天国があるとしたら、それがぐちゃぐちゃになっている？」
「惜しい。ここでは肉体の死が必ずしも死んだことにならない。意識が生きていればその人は生きていることになるんだ。それがどんな姿でもね」
「霊感があろうとなかろうと、幽霊が見えるわけ？」

「君の世界では幽霊と認識されるものが、ここでは生きている人と判断されるわけだね」
「――そんな……」
「ここで見たことがないかい？　巨人だの、大きな鳥だのと。あれは意識体だよ。肉体のない生き物がわずかに残った意識であんなものを作り出して生きている」
「アレと同じようなものに、私はなっているの？」
「君はまだ死んではいないだろう？　でも身体と意識が全く異なる働きをしているのは確かだ」
「身体は寝ていて、意識は起きている状態？」
「そう考えた方がわかりやすいね」
街路を曲がって裏路地に出るとすぐに階段がある。
その半地下へ降りるとゲイリーの家が見えた。
ゲイリーはソフィアを家へと通す。そして愛用の椅子に腰掛けながら買ってきたばかりの本を眺めた。
「リーはいつもそのときにその人に合った本を選んでくれる。君にはこれだ」
ゲイリーはソフィアが取ってきた革張りの本を手渡した。
「読めないわ」
「そうだね。こちらの部屋に行こう」
彼は書斎の奥の部屋を指差し、席を立つ。ドアを開くのでソフィアも続いた。
部屋は暗がりに覆われている。だが、ゲイリーが入ると淡く、幾つもの光があちこちに灯った。暗闇に浮いた光をよく見れば、買ってきた本と似たような本である。部屋はすり鉢状で、入ってきたドアから一本の階段が続き、部屋の中央と思われる場所は楕円の床がスポットライトを浴びているように居場所を主張している。
「貸してごらん」
ソフィアから本を受け取ると、ゲイリーは階段の途中で本を空中へと手放した。すると本は音もなく浮かび上がり、他の本と同じよ

うに光を放ち始める。
「これを読みたい時は、この本を呼びさえすればいい」
「……どうやって？」
ゲイリーは再び階段を降り始める。
「あの椅子に座って、こういう本が読みたいなぁと思うんだよ。そうすれば幾つか近寄って来て読んでくれる」
彼が指差したのはすり鉢の底にある明るいスペースにある三つの椅子だった。背もたれのついた白の椅子は何ら変わったところは見られない。
ゲイリーに連れられて椅子のある床まで着くと、彼は椅子を勧めた。
「さっき薦められたのは、ヘブンについての本だね」
ソフィアに続いてゲイリーも椅子に腰掛けると、くつろぐように目を閉じた。
「本を静かに読むというのは良いよ。自分の感覚が全て本に支配される……。憑かれるとでもいうのかな。余計なことを考えなくて済む」
ゲイリーの周りに、提灯のような本が五冊ほど並んだ。ソフィアにも三冊ほど、懐くように本が近寄ってくる。
「さぁ。目を閉じて。語りかけてくる本の声に耳を傾けてごらん」
言われた通りに目を閉じる。
そこは、確かに異世界だった。

14

火の暦二百五年。ある一人の少女が発見された。
彼女は巳の下級層に住む平民で、親はすでに無く、孤児院で育つ。発見の翌年、上級層に移され、巫女職を与えられる。火の暦二百七年に勃発したマティの反乱の際にはミカエル派に付いてその力を発揮した。土の暦三年、功績を湛えられ、後に女神の称号を受けるが、翌年に起こったラキアのクーデターにより、死亡。
彼女が生前作成したとされるエメラルド・タブレットは彼女の意思によって暗号化されているため、何人も触れることができなくなった。
「エメラルド・タブレット。それは世界最大の秘密とまで言われた謎の碑文だ。伝え聞くところによると、あらゆる過去を関知し、未来を完全に予知する機械的言語系列だと言われている。これは彼女、ソフィアの先天的能力を言語化した代物だという」
「ソフィア……私につけられた名前…」
エメラルド・タブレットの暗号には幾人もの魔術師が解読を試みているが、倒置も韻文も受け付けない碑文は今世紀最大の謎とされている。
エメラルド・タブレットとは一人の少女が先天的に持っていた視覚能力を分析、研究した結果を人為的に機械化した機械的言語系列である。パスワードとなる碑文は
「これは嘘偽りなく真実、確実にして、このうえなく真正である。一つのものの驚異を成し遂げるにあたっては、下にあるものは上にあるものに似ており、上にあるものは下にあるものに似ている。そして万物は、一つのものの仲立ちによって、一つものから成ったように、万物は順応によって、この一つのものから生まれた。このものの父は太陽で、母は月である、風はこのものをその胎内に持ち、その乳母は大地である。

このものは全世界いっさいの仕上げの父である。その力は、もし大地に向けられれば、完全無欠である。
汝は、土を火から、精妙なものを粗雑なものから、円滑に、極めて巧妙に分離するがよい。それは大地から天へ上昇し、再び大地へ下降して、優れたものと劣れるものの力を受け取る。かくて汝は、全世界の栄光を手に入れ、一切の不明瞭は汝から去るであろう。
このものは、すべての剛毅のうちでも、いやがうえに剛毅である。なぜなら、それはあらゆる精妙なものに打ち勝ち、あらゆる個体に浸透するから。
かくて大地は想像された。したがって、このものを手段として、驚異すべき順応がなされるであろう。このため私は、全世界の哲学の三部をもつ三重に偉大なる者と呼ばれる。私が太陽の働きについて述べたことは以上で終わる」
「それが……碑文？」
「そうだよ。難しいだろう？　何人もの先達は何度も碑文を分解し、ソフィアの嗜好まで調べ上げたけれど解読できなかった。ただ、碑文を解くには三つの要素が必要だということだけは解明した」
碑文解析の重要な鍵は三つある。一つは、彼女が覚えた文字はヘブンの古語であるサンクだということである。サンクは三千世界以前に使用されていた文字であり、主に聖書に使われている。二つ目は彼女に機械的言語系列を処理する能力はなかったことである。エメラルド・タブレットは元来、彼女の能力を研究対象とした論文である。その研究の結果、予知と知識の蓄積を言語化させたのだ。エメラルド・タブレットを作り出した研究者がいるのである。研究者は二人居た。ミカエル派筆頭のラファエルとその部下だったアズラエルである。彼等は良き友人であり、彼女の良き理解者だった。三つ目は、彼女の能力の根源である瞳である。原文が記してあるのはエメラルド・タブレット第一表層部、タブレットにある目次を引用するならば、“真実の部屋”である。それはサンク語を用いた機械言語で、彼女の網膜型を暗号化して構成されている。エメラルド・

タブレット解読における最大にして最重要な関門は、この網膜である。彼女と同じ網膜を持つ者が現れない限り、偽造品も碑文は受け付けない。恐らくは

「同じ網膜、同じ能力を持った瞳しか、エメラルド・タブレットは受け付けない……」

「……何が言いたいの？」

「君が考えている通りだよ。言いたくないようだから、僕から言おうか」

「聞きたくないわ」

「エメラルドはソフィアの瞳の色から付けられた名称なんだ。君と同じ、美しい碧色のね」

「嫌よ！　聞きたくない！」

「君が、エメラルド・タブレットの継承者だよ。ソフィア」

15

銀髪の男が椅子に座っているソフィアを覗き込んでいる。彼はソフィアを覆うように彼女の逃げ場を無くした。
「君をここまでエスコートしてきたアズラエルという青年、彼がエメラルド・タブレットの研究者の一人さ。そう、彼は君が何者かを知っていた」
「私には関係ない」
うつむいて目をきつく閉じてもゲイリーの声に容赦はない。
「君が、なぜアースに生まれたのかはわからない。でも君がタブレットを開く鍵だということは、確かだ」
「……だから、私を誘拐したの？」
「頭の良い子は嫌いじゃないよ。でも君は少し勘違いをしているようだね」
ゲイリーはソフィアの頭を撫でると、少し笑う。
「君は、たまたまこの世界に落ちたと思っているだろうけれど、それは違うんだよ」
顔を上げると、彼は目を細めた。そして、天使のように狡猾な含み笑いを漏らす。
「君は僕が喚んだ」
口を開いたまま言葉を無くしたソフィアを眺めて、ゲイリーは笑みを強くした。
「探知魔術を転移魔術と合成して幾つか三世界に放っておいた。その一つに、君は堕ちた。幸い、君は目を閉じた状態だったから見破られずに済んだんだよ」
「……堕ちた…」
「そう。デュナミスに見つけられたのは想定外だったけれど、どのみち十字路の魔女が彼等を導いてギの国へ来ることはわかっていたからね」

堕ちる、喚ばれる。
わけがわからない。
混乱したソフィアをゲイリーは更に煽る。
「君はすでに目を開きかけている。ヘカテの庭では僕の術を見破った。そして、真実の森でアズラエルの真実を見た」
「……あの大きな鳥が貴方の…」
「デュナミスが邪魔だと思ってね。意識体に術をかけて君たちを襲わせた。結果、君が見破ってしまったけれど」
だとすれば、森で見てしまったアズラエルの道は、本当のことで、鏡に映ったあの女性が、ソフィアだったのか。
あの、顔を大きく抉られた、碧の目の女性が。
「土の暦四年、ソフィアは死んだ。いや、殺されたんだ」
いつのまにかソフィアの周りに本はなく、ただ、暗闇ばかりが広がって、ゲイリーだけを浮かび上がらせている。
「さぁ、ゆっくりと。君の目を開いてごらん」
彼の後ろに大きな石版が浮いている。
否、鉱石のようだった。
それは美しい、エメラルドである。
ソフィアの等身ほどもある大きな壁版には何の文字も書かれていない。
壁版はゆっくりと回転しながら、暗闇に浮いている。
「答えはいつも君に語りかけるよ。……ソフィアを殺したのは、誰だった？」
答えはいつも真実だ。
だが、真実は優しい仮面の下に残酷な顔を隠している。
ソフィアを殺したのは、あどけなさが残る赤い瞳の青年。
アズラエル。
翠玉の壁版の輝きは、冴え冴えと暗闇に溶けた。

16

その瞳の出現は、確かに世界にとっての不幸だった。
人という意識体が無限の時をかけて解き明かそうとしている世界を、かの瞳は一瞬にして読み取ってしまうのだ。
過去。
現在。
未来までも。
だが、この瞳が人の手に委ねられたのは、人にとっても不幸となった。
暴く秘密のないことで、人は人ではいられなくなるのだ。
「私が生まれたのは総合病院」
淡い光を地面から刳り貫かれるように受けて、歩美は口を開いた。
「予定より少し早く生まれたので、すぐ無菌室に入った。両親と対面したのは二週間後。母は日本人、父はイギリス人。二親の遺伝子を色濃く受け継いで、私はこの黒髪と碧眼を持った」
「そう。そうだったわね」
鏡のように歩美に肯いたのは、彼女と同じように光を、淡い緑の光を受けている女である。波打つ長い焦げ茶の髪を垂らし、細い体に純白のドレスを身につけた姿はまるで花嫁だが、その白い顔は深い憂いを湛えている。
「あなたが———ソフィア？」
再び彼女は肯いた。鮮やかな碧の瞳が歩美を写す。
「そう。確かにそう呼ばれていた」
「呼ばれていた？」
「すでに私は私ではなく、貴女の一部となっている」
「……私は、やっぱり貴女なの？　ソフィア」
「いいえ」
ソフィアは憂いを深くして目を閉じた。

「私という概念はすでに無いの。だから、貴女は貴女であって、私ではない」
「――どういうこと？」
「そもそも、世界の秘密を知る人はいないの。私は、私であった時、他人の未来は見通せても自分の未来は観えなかった。それでも、私は他人の過去や未来――その人最大の秘密とも言えるものを見てしまう。これは元々あってはならない目だった。こんな目が世界に二つとあっては世界のバランスは崩れてしまう。だから、私は世界において既に存在せず、貴女は貴女という存在なの」
「私がこの瞳を持ってしまったのは、貴女の生まれ変わりだから？」
「その答えは半分正解だけれど、半分は違う」
「違う？」
「私はソフィアという存在。貴女は佐々木歩美という存在。この固有の存在が交わることはないわ。他の人々は転生を繰り返すけれど、私達は己の存在のみの付加価値しかないから、生まれ変わるという概念は存在しない。だけど私達がもし何かで繋がっているとすれば、この瞳」
ソフィアはふ、と目を開けて瞳に手を翳す。
「この瞳が私と貴女を繋ぐものとなっている」
「……つまり、私はソフィアの生まれ変わりではない…けれど、この瞳を受け継いだ」
「そう。瞳の人選は無差別に行われる。だから、絆と呼べるものはこの瞳」
「そして私は私であり、このまま永久に変わることはない……」
「でも貴女は大事なことを忘れてしまっている」
「……大事なこと？」
「忘れてはならないことを忘れてしまっている。そして私も」
「貴女も？」
「でも私は貴女が瞳を開いてしまったことで思い出してしまった」
歩美の手をとり、ソフィアは堅く握る。

「この瞳が私を一人でないと信じさせてくれる」
憂いの表情が少し緩み、穏やかな笑顔をソフィアは歩美に向けた。
その笑みに応えて、歩美も少しだけ口元を緩めた。

17

次に目を開けると、四方形の部屋に歩美は立っていた。しかし不思議と驚く気にもなれず、目の前に銀髪の男が満足そうに立っていても感動はなかった。

「おめでとう。ソフィア」

ゲイリーは嬉しそうに蒼の双眸を細めると、大げさに腕を広げて見せた。

「君のお陰で網膜型の照合を潜ることができたよ」

「……ここは？」

「エメラルド・タブレットの第一表層部。君に話したあの碑文がある場所だよ」

「文字がないわ」

「この擬似空間が碑文だ。碑文に関する言葉を発すれば関連文が浮かび上がる」

「詳しいのね」

「何度も試したからね」

部屋の内側は方眼紙のような升目で構成されており、上下左右の方向も危うくなる。

「だから応えてもらうよ———。佐々木歩美さん」

佐々木歩美。

この言葉で歩美は声も出なくなった。ズンと胸の奥を何かに縛られている感覚に襲われ、冷や汗が噴き出す。

「……どうして……」

「名前のことは聞いているみたいだね？　だけど言っただろう。僕が君を誘拐したんだよ。名前くらいは調べてあるさ」

いつかラグエルが話してくれたことだ。名前を知られるということは、生殺与奪を握られることだと。

さぁ、とゲイリーは道化師のように笑う。

「早速応えてもらおうか。時間もないようだしね」
歩美は息苦しさに膝をつく。
「一つのものの驚異を成し遂げるにあたっては、下にあるものは上にあるものに似ており、上にあるものは下にあるものに似ている。これは何か」
「そ、それは……」
意思に反して、歩美の口からはよどみなくゲイリーの応えが滑り出した。
「世界であると同時にアースを指す」
歩美の驚愕を他所にゲイリーは続けた。
「そして万物は、一つのものの仲立ちによって、一つものから成ったように、万物は順応によって、この一つのものから生まれた。とは何か」
「世界の順応者。それは転生する生物」
「このものの父は太陽で、母は月である、風はこのものをその胎内に持ち、その乳母は大地である。
このものは全世界いっさいの仕上げの父である。その力は、もし大地に向けられれば、完全無欠である。
とは何か」
「世界の秘密を暴こうとする者であり、決して秘密を暴けない者。人」
「汝は、土を火から、精妙なものを粗雑なものから、円滑に、極めて巧妙に分離するがよい。それは大地から天へ上昇し、再び大地へ下降して、優れたものと劣れるものの力を受け取る。かくて汝は、全世界の栄光を手に入れ、一切の不明瞭は汝から去るであろう。とは何か」
「アース、ヘブン、ソドムを含めた世界の法則。即ち三世界の破壊と共存の運命」
「このものは、すべての剛毅のうちでも、いやがうえに剛毅である。なぜなら、それはあらゆる精妙なものに打ち勝ち、あらゆる個体に

浸透するから。とは何か」
「世界を統治するもの、しかし何物も統治できない者。ヘブン」
「かくて大地は想像された。したがって、このものを手段として、驚異すべき順応がなされるであろう。とは何か」
「世界で唯一順応しない者。それはソフィアと呼ばれ、佐々木歩美と呼ばれた者。しかし、ここではソフィアと呼ばれた者の瞳」
「このため私は、全世界の哲学の三部をもつ三重に偉大なる者と呼ばれる。私が太陽の働きについて述べたことは以上で終わるとは？」
「世界の秘密を暴く者。翠玉の瞳」
方眼紙が一斉に解けた。
それは一つ一つが意思を持って、バラバラと八方へと散らばっていく。散らばった破片はそれぞれに色を変え、終には新たな世界を作り出した。
「――――――……これが？」
ゲイリーの驚いた声が響いた。
歩美は膝をついたまま、辺りを見回した。
彼女達が立っているのは硝子の部屋である。視界の及ぶ限りに果ての無い空が広がり、明るい光が満ちている。散らかった文献も、開け放たれた端末も、引かれた椅子も、カップの乗った机も、人が居たことを如実に語る。
「……これは…僕の部屋？」
うめいたのはゲイリーである。困惑した蒼の瞳が部屋の中を彷徨う。
「それも……あの日のまま……」
しばらく戸惑うように部屋を歩き回っていたが、彼は歩美に近づき、彼女の腕を掴み上げた。
「来い！」
乱暴に歩美を引きずり、部屋を出る。硝子の回廊を突き当たると、三人が対峙していた。
ちょうど、剣を振り上げたところだった。

細腕に似合わぬ両手持ちの大剣を振り上げて、彼女が男に斬りかかっている。
「ソフィア……」
辛うじてうめく歩美を見遣って、ゲイリーは細く笑んだ。
「彼女に会ったのか」
息苦しさに口を閉じると、彼は口の端を上げた。
「ならよく見ておくんだ。彼女の過去を」
ソフィアが斬りかかったのは、長いブロンドの男である。白の詰襟を来た姿はどこか西洋の宗教画のようだ。想像上の天使のように穏やかな笑みを湛えている。
だが、ソフィアが大剣を向けているこの場では悪魔のようにも見えた。
「駄目だよ。ソフィア」
滑らかなバリトンが硝子の廊下に響く。
ソフィアはそれに応えるように両手剣を構える。両刃のそれは屈強な戦士の持つ重装備だが、彼女は愛用の剣としているようで、痛々しいほどさまになっていた。
彼女が踏み出した。
純白のドレスを翻し、切りかかるのではなく、眉間を射抜くような刺突。紙一重で避けられるがつんのめるどころか男を追って袈裟斬り。地面に切っ先がつくまでに引き上げ逆唐竹。だが、男はブロンド数本を残してバックステップで逃げた。
「———…本気かい。ソフィア」
「……私は、あなたのように嘘が得意ではないの。ラファエル」
男、ラファエルを見たソフィアの碧眼は、鮮やかに光沢を放って彼女の剣を映した。
「やめろ！　ソフィア！」
ソフィアの後ろから彼女の肩を掴んだのは、アズラエルだった。いつか歩美が見たように、眼鏡はなく、紅い双眸は出会った時よりも幼い。

「放しなさい。アズラエル」
ソフィアに低く応えられ、アズラエルは顔を歪めた。
「私の問題よ。――――いつか話したわね。私の育った孤児院のことを」
アズラエルに反して、ソフィアは無表情に口を開く。
「……異教を信仰していたと、告発されて捕まった…」
「そう。これは後に誤認だとわかったわ。でも疑惑を向けられた時点で異端審問は極刑を余儀なくされる。だから、私がここへ――――研究施設へ来ることで孤児院の皆は釈放されるはずだった……」
ソフィアは一度きつく目を閉じると、意を決したように見開き、ラファエルを睨みつけた。
「でも、皆殺されていた……この男の指示で！」
彼女はもう一度剣を構えて、地を蹴った。
「ソフィア！」
アズラエルの制止は効かない。ソフィアはすでに剣を振り上げている。
ラファエルはこのソフィアをどう切り返すか、ゲームを楽しむように笑んで腕を組んだ。
「やめろ！」
それは、ソフィアが予想していなかったことに違いない。
振り下ろす剣先にアズラエルが立ったことは、ラファエルでさえも。
「アズラエル！」
初めてラファエルの顔に焦りが見えた。アズラエルを突き飛ばし、ラファエルはソフィアの剣先に立つ。
血飛沫が上がった。
飛沫はソフィアの白い頬にも届いたが、彼女は放心したように剣を手放していた。
「……満足かい？」
そう、場違いなほど穏やかに笑んだのはラファエルである。彼の

服は切れている。その切れ間からはだくだくと鮮血が染み出した。
ソフィアの剣が廊下に落ちた。硝子の廊下に音叉のように地鳴りがした。
剣先についた僅かな血は硝子の壁面に色を加えた。
ラファエルは流れ出る自分の血はそのままに、突き飛ばしたアズラエルに顔を向ける。
「大丈夫かい？」
「……何故……」
アズラエルが眉間に皺を寄せるのを見て、ラファエルは目を細めた。
「なぜ……。ソフィアが神官になるときになって…」
アズラエルは困惑の眼でラファエルを見やるが、彼は口の端を上げたまま息をついた。
「気がつかない？　僕は、君が嫌がることなら何でもしたくなるんだよ」
「ラファエル！」
アズラエルの眼が一際紅く灯った。
それは前兆でしかない。
ラファエルが咄嗟に身を捩らなければアズラエルの放った腕に囚われていた。
「駄目よ！　ラファエル！　アズラエルを怒らせないで！」
ソフィアは落とした剣を拾い、走った。
彼女の先ではアズラエルがラファエルに詰め寄っている。
「アズラエル！」
その声に反応したアズラエルの瞳は漆黒。闇の光沢さえある黒瞳になっていた。
それに気付いたソフィアが剣を構えるのは、アズラエルの腕が彼女に突き出されるより半瞬遅い。
アズラエルの手刀が嫌な音を上げた。
彼の手が突き破ったのは、ソフィアの右目。

「――こうして私は死んだ」
アズラエルの腕を取って、ソフィアは彼の手を自らの右目から引き抜く。
抉られた右目は血飛沫をあげたが、彼女が手を翳すとそれは元の白い顔になった。
アズラエルは腕を突き出したまま、まるで静止画像のように止まったままだ。
「……ソフィア」
ゲイリーはうめいた。
「生きていたのか？」
「いいえ。死んだわ」
ソフィアは淡々と応えて廊下の、更に奥を指差した。
「あなたがそこで見ていた通り」
彼女が指差す暗がりにいつからそこに居たのか人影がある。ラファエルと同じような白の詰襟を着た、銀髪の男である。
「ゲイリー……」
歩美が呟くと、ソフィアは首を振る。
「彼の本当の名前は、レミエル。彼はとても不運だった」
「――不運？」
眉根を寄せたのは当のゲイリー、レミエルである。
「私の何処が不運だと？　確かに私はここで君たちを見ていた。そして異端審問に密告した。私は君の、そうソフィアが嫌いでね」
レミエルは口元を歪める。
「何でも見通してしまう目……。そんなものは神への冒涜だ。だから君たちを見殺しにして、ソドムに逃げた」
だから、と彼は歩美を横目で睨んだ。
「この瞳が転生したと知って、探した。こんなもの、この世に無いほうがいいからね。私の手で潰してやろうと思った」
「確かに、この瞳は無い方が良いわ。幸福よりも不幸をより多く映すから。でもね…」

ソフィアはレミエルを見遣って、言葉を切った。
すると留まっていたアズラエルが再びソフィアの右目を潰した。
ソフィアは膝から力を失い、ダラリと空中にぶら下がる。手を引き抜き、彼女の体を硝子の床面に打ち捨てたアズラエルは、無表情に標的を傍観していたラファエルに移した。
ラファエルは顔をしかめて体勢を整える。だが、
「た、助けてくれ！　アズラエルが暴走を……！」
通信の声が静寂の均衡を崩した。
声に導かれるようにアズラエルはそちらへと走る。
ほぼ一足飛び。
目指す先は廊下の突き当たり。
ちょうど暗がりの死角から一人の男が飛び出してくる。
レミエルだった。
悲鳴をあげるが、アズラエルの黒い瞳には届かない。
手刀はレミエルの首を既に捉えていた。
その腕をレミエルは掴むが、遅い。
「嘘だ！」
歩美の横に居たゲイリーはアズラエルの腕に掴みかかった。しかし時は何もかもが遅い。
アズラエルがレミエルの首から手を離したときには、レミエルの体は透明な硝子の床に崩れ落ちた。
「ソフィア！」
ゲイリーは同じように倒れているソフィアの胸倉を掴み上げた。
「何故、私にこんな幻想を見せる！　私はエメラルド・タブレットの謎を解いたんだぞ！」
揺さぶられてソフィアは残っている左目を開けた。
「忘れてしまった？」
「……何？」
「エメラルド・タブレットの碑文を」
「何万回も繰り返して読んださ！　そんなものは！」

「では第一の文は？」
「これはうそいつわりなく真実、確実にして――――…」
途中まで口にして、ゲイリーは目を見開いた。
「続きを」
ソフィアは無情に告げる。
「続きを」
無理だ。
歩美は顔をしかめた。
ゲイリーは震えのあまり、呂律が回っていない。
ソフィアもそれを確認したのか、静かに続けた。
「これはうそいつわりなく真実、確実にして、このうえなく真正である。これはエメラルド・タブレットの本質――――…」
言い終えたソフィアをゲイリーは壁面に叩きつけた。
血飛沫が上がるが、ゲイリーにはもう何も見えていない。
嘘だ。
嘘だ。
声にならない呟きを漏らして頭を抱えた。
「エメラルド・タブレットはあなたが解説した通り、瞳を解析した結果作られた、記録と予知能力を備えたシステム」
倒れていたソフィアは起き上がった。既にその白い顔に傷はない。
「システムは人のように嘘をつけないのよ。レミエル」
「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
ゲイリーの叫び声とともに、硝子の廊下はその役割を放棄した。
初めからそこには何もなかったように全ては消え失せ、ただ、何もない空がレミエルの絶叫と惨劇を飲み込んで、消えた。

18

扉を蹴破ったのは、一人の男だった。
黒髪に眼鏡の、紅い双眸。
アズラエルである。
彼はひとしきり、飛び込んだ部屋を警戒するように見回したが、やがて一つのドアを見つけて足を向けた。
そして、視線の先にあるものを見つけて愕然と顔をしかめた。
「――――やはり、これが……」
うめいた彼の目は確信と困惑で揺れた。

「貴女を探しに来たのね」
レミエルを見送った後、残ったのはただの暗闇だった。だが、目を凝らすだけで、瞳には何処の景色もテレビを見るように見渡すことができた。
その暗闇を唯一共有できるソフィアが歩美の隣で呟く。
「貴女が今の瞳の所有者だから…」
「ねぇ」
歩美はソフィアに向き直る。
「なぜ、アズラエルとラグエルは私を保護したの？」
「いいえ。保護ではないわ。ラファエルが出した指令は監視」
ソフィアは途端に目を細めた。
「彼等の元々の指令は、エメラルド・タブレットの奪還」
「ゲイリー……レミエルが盗んだ？」
「そう。意識体となって彷徨っていたレミエルが何故かソドムに落ちて別の人格として固有の存在となった。彼はエメラルド・タブレットのために生かされた」
「何のために？」

「それは……」

彼女達の眼前まで、アズラエルが歩み寄っている。
恐らく舞台にあるエメラルド・タブレットに近寄ったのだろう。
歩美達はそのタブレットの内部にいるが、こちらから何かしない限り、アズラエルが気付くことはない。
「ああ、それがエメラルド・タブレットね」
もう一人の声が本の劇場に響いた。
薄暗い闇に立つ長身はお伽話のように端正な顔立ちで、肩までの茶髪にジーパン姿もさまになっている。
「……ラグエル」
アズラエルは不機嫌さを隠そうともせず低く呟いた。
「おいおい、そんなに怒るなよ」
「……お前、本当はここへ何をしにきた」
挨拶もせず詰問するアズラエルに、ラグエルは肩透かしをするように肩をすくめる。
「何って任務さ。アズラエルと同じ」
「――――……ソフィアを殺すように言われたのか？」
殺気を感じて、歩美の方が少し息を呑んだ。彼等には歩美が見えていないはずだが、彼女の背筋には鳥肌が立った。
当のラグエルはあからさまな敵視をものともせず、微風が吹いたかのごとく口の端をあげた。
「アズラエルこそ、任務を忘れたのか？　俺達の任務は、エメラルド・タブレットの奪還と破壊だぜ？」
「なら、彼女は関係ないはずだ」
アズラエルのいつもの無関心からは考えられないほど語気が荒い。
「それこそふざけるな。彼女は瞳の継承者だ。タブレットと関係がないどころか元凶じゃないか」
ラグエルはいつもの空っぽな笑みをアズラエルに返した。

「エメラルド・タブレットってのは、瞳が重要な鍵だろ？　なら瞳がこれ以上転生しないようにすることも含まれているのは当然じゃないか」
アズラエルは言い返すことができないのか舌打ちをする。

「……ソフィア。これ、本当？」
事態を眺めていた歩美は不安になってソフィアを見遣る。彼女は、淡々と肯いた。
「瞳が目覚めた状態で、私と貴女の意識体が揃っている今なら、エメラルド・タブレットを完全に破壊できるわ」
「もう、転生しなくて済むの？」
「――――……そうね」
それが、幸福か不幸かはわからない。だが、ソフィアには転生したくない理由がある。
「そっか……。ソフィアには大切なことがあるからね」

暫く押し黙っていたアズラエルが口を開いた。
「……やはり、エメラルド・タブレットを盗んだレミエルがギに居ることを知っていたな？　ラグエル」
「だとしたら？」
ラグエルは小首を傾げる。
「ヘカテの庭で襲ってきた鳥の意識体がレミエルのものだとわかっていたから、わざと鳥の呪縛を解かなかった」
「そうだね」
「真実の森でソフィアに俺の過去を見せた」
「それは偶然だよ」
「ギの国で殺せと命じられた時、俺の黒眼を呼び出した」
「そうでなきゃ、ソフィアが逃げられなかった」

「……そうして混乱を誘い、ソフィアを街へ逃がし、レミエルに発見させた」
「お見事」
すごいすごいとラグエルはおざなりな拍手を送る。
「どうして、彼女を逃がした！」
アズラエルは怒号で拍手を一蹴した。
「誰だって、死ぬのは怖いだろう？」
「彼女は、あそこでソドムでの意識体を亡くせば元の世界に戻れた！」

「！」
思わず息を呑み、ソフィアに目をやる。彼女はアズラエルとラグエルをじっと見たまま、口を開いた。
「……そうね。貴女の場合、アースに本体が残っているからこの世界では死なない。だから、その機を狙ってアズラエルは貴女を繋いでいるソドムの意識体を消した反動でアースに帰そうとした。それは、ギの国の姫も承知だったの」
「だから、私の首を刎ねると……？」
「彼女は瞳に関しては寛容よ。大局の一部として瞳の存在を考えているから、便利な手駒としても使えると判断したのね」
「要は、考えようってこと？」
「自然の摂理はとらえ方一つで、変化するの」

ラグエルは困ったように眉根を寄せた。
「驚いたよ。彼女が瞳の継承者だって、君が一番わかっていたはずなのに、ソフィアをアースに帰そうとするなんてね」
「———……彼女はもう、アースに居るんだ。ヘブンの事情に振り回す必要はない」
「それじゃ困るよ。エメラルド・タブレットの破壊はソフィアと、

もう一人のソフィアの抹殺が不可欠なんだから」
アズラエルは歩美達を、エメラルド・タブレットを庇うように立った。
「もう一度言う。……もう、ソフィアを解放してくれ」
ほとんど懇願に近いアズラエルの言葉に、ラグエルは目を細めて息を吐いた。
「アズラエル……。僕は君が嫌いではないよ」
でも、とラグエルは笑んだ。
「そういうところは嫌いだ」
同時に彼は両手を突き出していた。
手の平からは複数の光が文字となって溢れ出ている。
円陣を組むそれはアズラエルがラグエルに飛び掛るよりも早く彼を捕えた。
「……がっ！」
アズラエルの体に巻ついた文字は、次第に彼の体へと染み込んでいく。そのたびに、アズラエルは呻き声を上げた。

「ソフィア……」
「駄目よ。歩美」
ソフィアは歩美の口を押さえた。
「今は貴女自身のことを考えて」
歩美は何のことかわからず顔をしかめた。
「私は、忘れていた過去を思い出した」
あの、硝子の廊下の惨劇だ。
「歩美、貴女も忘れていることがある」
「……忘れていること？」
「そう。とても大切なこと」
「……大切なこと」
ソフィアの言葉に導かれて、歩美の視界からアズラエルとラグエ

ルは消えた。
「貴女の小さい頃は？」
「普通よ。みんなと同じように幼稚園に行って……」
「いじめられていたわね」
「いじめは今まで付きまとっていたわ。でも何とか生きてきた……」
優しい両親と、いじめられてはいたが友達もいた。
「小学校の思い出は？」
「林間学校よ。四年生の」
「中学校の思い出は？」
「文化祭。みんなでバザーを開いた」
「高校は？」
「高校……」
そう。
あの日も地下鉄に乗って。
大切なこと。
「あの日は。いつもより遅く家を出た」
「ソドムに落ちた日？」
「そう。あの日」
「地下鉄に乗って学校へ？」
「……違う」
学校へ行こうとしていたんじゃない。
忘れていた。
「私は……地下鉄に乗ろうとしたんじゃないの」
本当は地下鉄が来る前に。
「線路に飛び降りようとしていたの」

19

朝の人ごみの中で、歩美は一つの決意を胸にしていた。
迷いはなかった。ただ、その固く心に決めたものが、生きていく方向には向いていなかった。
朝のホームで待ち構える人々とは別のことで彼女は電車を待っていた。
理由はない。
強いていうなら、疲れてしまった。
病院へ行けば、鬱と診断されていたのかもしれない。
だが、この病気の治療方法はこれが一番楽で手っ取り早いと歩美は信じて疑わなかった。
電車が来る。
鞄の中には遺書が入っていた。
その鞄を置いて、線路へ。
電車の灯りがホームに滑り込んできた。
足を踏み出して、
「あ」
と思う。
鞄をまだホームに置いていない。

20

「……歩美？」
瞬きする。
ソフィアが覗き込んでいた。
「……思い出したの？」
「――――……」
思い出した。
そして、歩美は瞳の性質も理解していた。
碧玉の瞳は同じ目を持つ者のことは見えないのだ。
だから歩美は首を振る。
「……そう…」
ソフィアは少し目を細めたあと、視線をアズラエル達に向けた。

状況は悪化している。
アズラエルの全身に文字が刻印されて、彼は床に倒れていた。
「忘れたのかい？　アズラエル」
ラグエルは倒れているアズラエルを、それでも慎重に手をかざしたまま光の文字を手の平に収めた。
「僕がエメラルド・タブレットの破壊と共に君の監視役になった理由を」
「――――――…意識を操る術か」
倒れたまま、アズラエルはうめいた。
「今のソフィアともう一人のソフィアは意識体だからね。物理攻撃じゃ、二人とも転生してしまう」

「……ソフィア。アズラエルの眼が黒いわ…」

彼の鮮やかな赤が、今は光沢を放つような黒瞳に変わっている。
「――――アズラエルはヘブンで唯一、意識体をも殺す力を持っているから」
ソフィアはわずかに眉根を寄せた。
「……意識体を殺す？　レミエルは生きていたわ」
「レミエルの抜け殻を、ラファエルが繋ぎ合わせたの」
「……どういうこと？」
「ヘブンでは、人が死ぬと意識体が体から分離する。でも、体にも意識が半分残るの。意識が本体と考えるヘブンでは、体に残った意識を残り香と認識するから、ラファエルはその残像で貴女がゲイリーと呼んでいたレミエルの擬似意識体を作ってソドムに落とした」
「――――何のために？」
ソフィアは平板な口調だった。
「私を殺すためよ」

「ソフィアを……殺すため？　同じ仲間だった！」
アズラエルの声を、ラグエルは口の端をあげただけで一笑した。

「ラファエルにとって、私は研究対象であり、それ以下でもそれ以上でもなかったのよ」
「なら、どうして殺すなんて……」

「ソフィアが邪魔になったんだ。アズラエル。君のためにね」
ラグエルは慰めるように首を傾けた。
「君がソフィアを好きにならなければ、よかったんだよ。アズラエル」

「――…アズラエルは、その異端な力から元は私と同じ研究体だった。でも、ラファエルの助手となったことで研究チームに入った」
「研究体……」
「意識体を殺す力、というのはそれだけでも脅威よ。意識体が本体と考えられているヘブンでは尚更ね。でも、ミカエル派筆頭のラファエルが彼を自分の管理下に置くことで上層部も助手となることを承諾したの」

「……ラファエルは、もうミカエル派筆頭どころじゃない……。その権力はヘブン全体に及んでいる…」
「そうだよ。それは君がよく知っているとおりだ。アズラエル。僕は詳しい事情は知らないけれど」

「アズラエルは、能力を解放すると見境無く殺してしまう性質を持っている。だから危険視されていた。ラファエルの意識体を癒す術が彼の暴走を食い止める唯一の手段だったの。他の誰でもないラファエルだけがアズラエルを扱える……そう判断した上層部はアズラエルを研究員にすることを認めた」

「アズラエル。君の能力は素晴らしいよ。だから能力が解放される前にヘブンに送る。君の役目はここで終わりさ」
「……俺の力で何をするつもりだ…」
「ラファエルは粛清をするって言ってたけどね」

「戦争をするつもりなのよ。ラファエルは」

「戦争？　ヘブンで？」
「ヘブンは戦争と陰謀の世界よ。ラファエルは政敵や敵が二度とヘブンに現れないようにアズラエルの能力で殺させるつもりなの」

「だから、まずソフィアで君の能力が転生にまで影響するかどうかを見てみたいんだってさ」

「……ラファエルは、あくまでもソフィアを研究対象としてしか見ていないのね……」
「――……アズラエルはね…」
ソフィアは視線をアズラエルから外して、自分の爪先に落とした。
「助手として入った時は私よりも年下だった…。だから、ラファエルと私は、弟みたいに可愛がっていて…」

「それが全部嘘だと……？」
「嘘ではないさ。ラファエルも、ソフィアを本当の妹のように可愛がった。……ただ、君たちのことを知って、淋しくなっただけ」

「駄目よ。ラグエル！」
ソフィアは今までの無表情を捨てて、壁面に手をついた。
「ソフィア！」
壁に手をつけば、エメラルド・タブレットの外側と接点ができて、こちらのことがアズラエル達に知られてしまう。
だが、ソフィアは壁面を叩いた。
「アズラエルをこれ以上刺激しないで！　彼はもう、能力を目覚めさせているわ！」

ソフィアの声が届いたのだろう。
ラグエルはハッと息を呑んで、今まで停滞させていた手の平の呪文をアズラエルに向けた。
だが、
「小賢しい真似を」
低くうめいたアズラエルは、呪文を浴びたまま立ち上がる。
その目は、混沌とした昏い輝きを放って、愉しげに嗤った。

21

「珍しいこともあるものだ」
低く、しかし愉しげに黒髪の男は口の端を上げた。
「そ……そんな、彼の能力に人格なんてなかった……うぐっ……！」
ラグエルはその整った顔を苦痛に歪めた。
「口の訊き方には気をつけろ。ママに教わらなかったか？　ラグエル坊や」
毒のある言葉と共に、黒髪の男はラグエルの腹を踏んでいた足に体重をかける。靴底の裏から、嫌な音が鳴った。
「ああ、そうか。アズラエルはお前に私のことを話していなかったな……」
何気なく足を上げると、男は、つい先ほどまで、たとえ裏切られようと友人であり続けようとした相手を、ゴミを悪戯に弾くように顔を蹴り飛ばして階段の隅に追いやった。
ラグエルは困惑のまま、否応なく床で昏倒した。
「……イブリース……」
「ソフィアか。久しいな」
黒髪の男は真っ直ぐと、彼からは見えないはずのエメラルド・タブレットの中にいるソフィアを見遣った。
「ソフィア……彼は……」
黒髪に非常識な赤の瞳。それは確かにアズラエルと呼ばれていた男だった。だが、今やその面影はなく、光すらも飲み込むような黒瞳以外の姿形は同じでも全くの別人となっている。
問い掛ける歩美には向かず、ソフィアもまた黒髪の男、イブリースを睨んだまま口を開いた。
「彼はイブリース。能力を使うアズラエルは元々野生の獣のような理性しかなかった。けれど、彼は決して獣ではなく、生まれたての赤ん坊だったの。彼は言わばアズラエルの弟として成長して、一個

の人格として存在するようになった」
「二重人格……？」
「乖離性の人格。赤の瞳のアズラエルと黒の瞳のイブリース。彼等は共に育ったのよ」
「君が元気そうで安心した。ソフィア」
イブリースは漆黒の目を細めた。
「普段は決して私に体を譲ろうとしないアズラエルが、今日に限って呆気なく渡してくれるとはな。何かあると思っていたが、君がいたのか」
「彼はとても狡猾で、ラファエルにさえ自らの存在を気付かせなかった」
「――――ラファエルとは基本的に馬があわない」
応答しないソフィアに、イブリースは肩をすくめてみせた。
「私を殺さなかったのも彼よ」
「殺さなかった？」
歩美も思わずソフィアと同じようにエメラルド・タブレットの境界に手をついた。
「その気になれば、彼は私を、今ここにいる人格でさえも殺すことができた。でも、イブリースは私の肉体を壊すことでヘブンから追い出したの」
「君が死ぬと、アズラエルは自責で死にかねない。何処かでソフィアには生きていてもらわなければならなかった。私も彼女を殺すことは本意ではなかった」
「イブリース。アズラエルは？」
「君の質問の前に、私の質問に応えてもらおう。ソフィア、君の側には既に後継者が居るのだね？」
「……ええ」
「では彼女は私が殺そう」
まるで料理を作ってやろうとでも言うようにイブリースは歩美に視線を向ける。こちらが見えている。歩美は確信した。

「後継者を殺せば、再び碧玉はソフィアの物となり、ソフィアは今の擬似人格から個の人格として昇華する」
「アズラエルは私がすでに死んでいると受け入れているわ。イブリース」
「これはアズラエルの考えだったとしても？」
ソフィアは境界から手を離した。わずかに震える手で自分の口元を押さえている。今にも泣きそうな、触れれば壊れてしまいそうな複雑な驚愕を隠すかのようだ。
「ソフィア。君は私を勘違いしているようだ」
イブリースはソフィアを慰めるような声を口にしながら、獲物を追い詰める眼光でタブレットの中の彼女を見つめた。
「私は一度としてアズラエルの意向に背いたことなどないのだよ。私は私であると同時にアズラエルの一部でもある。ある意味、君の瞳と似ている。瞳は宿主の物でありながら、それ自身が時間を移動し、継承される。私という能力も継承されたものだ。そもそも、私はアズラエルに逆らおうとしたことは一度もない。むしろ、彼の願いを叶えようと尽力してきたつもりだ」
「――……貴方はアズラエルの隠していた欲望を自らで体言しているだけよ……」
震えた手を握り締め、ソフィアは境界に手をついた。
「イブリース……貴方のために、アズラエルがどれだけ苦しんできたと思っているの？」
「ソフィア。君には見えているだろう。私という存在がなければ、アズラエルは一生、アースから出ることはできなかった」
「……アース？　アズラエルが……？」
「アズラエルは、元はアースに住んでいた」
イブリースはソフィアから歩美に生徒を移した。
「彼はヘブンとソドムの混血だ。だから、どちらにも受け入れられず、アースで十七年間を過ごした。だが、ヘブンに能力を発見され、連れ去られた」

「彼は、ソドムの人でもヘブンの人でもなく、アースの人間でもない……」
「そういうことだ。それに私は戦争などに興味はない。平和主義のアズラエルも戦争には反対した。利害が一致すれば、協力ぐらい惜しまない」
手をのばす。イブリースの長い指がエメラルド・タブレットの表面に触れた。
「瞳の後継者。君に恨みなどないが、この世から消えてもらう」
指先がぬるりとタブレットに滑り込む。溶け込むように入り込んだ指先はすでに手首まで達し、歩美達が触れていた境界を突き抜けた。
「そんな……！」
ソフィアは歩美を連れて後退る。彼女の驚愕を他所に、イブリースの手は境界を裂き、外側から食い破るように境界に人が通れるほどの穴を開けてしまった。
イブリースは、にぃと口の端を上げて、闇色の双眸を細める。
「このエメラルド・タブレットはアズラエルが作ったのだぞ？　システムの解除法を私が知らない訳がないだろう」
ソフィアは歩美を庇うようにして立つが、彼女の体は、震えていた。エメラルド・タブレットのソフィアと歩美だけが共有していた暗闇の空間にイブリースが靴音を響かせるたび、ソフィアの肩が揺れる。
「ソフィア」
イブリースの声を間近で聞けば、彼女の背中から体温が引いていく。
イブリースの声は、アズラエルの声でもあるのだ。
「君が私に抵抗できるとでも思っているのか？」
だが別人の口調は辛うじてソフィアをこの場に止めている。
そう。
彼女はまだ大切なことを忘れている。

「無駄よ」
歩美はソフィアに並んで、イブリースと対峙した。
「私を殺しても、ソフィアは貴方の世界に帰れないわ」
ほとんど歩美を眼中に入れていなかったイブリースは初めてこちらを見遣った。
「無駄とは？」
「貴方は碧玉の瞳が欲しいわけじゃない」
「そうだな」
イブリースは面白がるように歩美に視線を移す。
「ソフィアという人が欲しいんでしょ？　私を殺して碧玉の瞳を彼女に返しても、碧玉の瞳の転生は止められないわ。いずれ第二、第三の私みたいなのが現れるだけよ」
「……そうか。君は既に瞳を半分、手に入れている。つまり、瞳は不完全な状態。定着した瞳を半分に分割するようなことになれば、均衡が取れず……」
「体を失っているソフィアは消滅するわ」
「当然、体が残っている方が有利、というわけか」
イブリースは自分の応えを含むように顎を指でなぞった。
「アズラエルは、瞳を解放すればソフィアの人格も昇華されると考えていたが、それは後継者が完全に瞳を取得している時点で起こりうるであろう予測であって、不完全な場合は可能性が限りなく零に近くなる」
「だから、私を殺せば、逆にソフィアの方が消えてしまう可能性が高くなるの」
「……歩美……」
ソフィアが不安げに歩美を見るが、歩美は構わない。
自分には見えていて、ソフィアには見えていないものがある。
それは今、ソフィアと歩美が瞳を共有していることが原因だ。ソフィアには見えないことが歩美に見え、歩美に見えないことがソフィアに見える。

イブリースは瞳が不完全だと考えたが、その実はエメラルド・タブレットの中に二つに瞳が存在することで生じる反発の結果であって、瞳は二つで一つ、ソフィアの瞳も歩美の瞳も欠損はない。
「ソフィア。思い出して」
「何を……？」
焦げ茶の髪に縁取られた小さな顔を彼女は傾げる。
「このエメラルド・タブレットを貴女が作った、本当の理由を」
タブレットに大きな穴が開いた。
窓と言ってもいい。
外は蒼い空が広がり、それは暗闇の空間を覆った。
「イブリース、アズラエル」
呼びかけると辺りを見回していたイブリースは眉根を寄せた。
「何をした？」
「ヘブンと繋いだのよ。元々、エメラルド・タブレットはヘブンで作られたから時間は繋がっている」
「まさか……」
「私は元の世界に帰るわ。だからこれでお別れよ」
歩美は思い切り、ソフィアをイブリースに向かって突き飛ばした。突然のことに体のバランスを崩した彼女をイブリースは難なく受け取る。
「ラグエルも連れて帰ってあげて。アズラエルが悲しむわ」
「――――君は、瞳を手に入れていたのか」
険しい黒の瞳に睨まれようと、歩美は笑ってみせた。
「ハズレ。そもそも瞳は二つで一つなのよ。能力が分割されることはないの」
ソフィアの肩を抱いたまま押さえつけているイブリースを確認すると、歩美は二人から離れる。
「ソフィアを連れて帰るのね。今しか無いわよ。私が瞳を継承したこの時しか、ソフィアに触れることなんてできないもの」
既に体を失い、碧玉の瞳の影響で転生すらできないソフィアを得

るなら今しかないのだ。いかに死の認識がないソドムといえど、意識体にも寿命がある。
「駄目よ。歩美！」
ソフィアがイブリースの腕の中でもがくが、彼がしっかりと彼女を捕まえてくれている。
「帰れるのよ。ソフィア」
「違う……違うの！」
必死にソフィアは腕を動かすが、イブリースの腕を振り解くことができない。
「確かに今回は（・）、いつもと違う…！　でも、このままでは、貴女が壊れてしまうわ！　歩美！」
「私は正気よ」
確信があった。
「このまま戻れば、私は無事、電車に轢かれるわ」
「違う！」
ソフィアはイブリースの腕を掴んだ。
「お願い！　アズラエル！　起きて！　イブリースは知らないのよ！　彼女の未来を！」
「大丈夫よ。ソフィア。アズラエルとお幸せにね」
エメラルド・タブレットを作った本当の理由は碑文に刻まれている。
一つのものの驚異を成し遂げるにあたっては、下にあるものは上にあるものに似ており、上にあるものは下にあるものに似ている。
三世界を知る者。
そして万物は、一つのものの仲立ちによって、一つものから成ったように、万物は順応によって、この一つのものから生まれた。
三世界の血を引く者。
このものの父は太陽で、母は月である、風はこのものをその胎内に持ち、その乳母は大地である。
このものは全世界いっさいの仕上げの父である。その力は、もし大

地に向けられれば、完全無欠である。
　知られてはならない秘密。
汝は、土を火から、精妙なものを粗雑なものから、円滑に、極めて巧妙に分離するがよい。それは大地から天へ上昇し、再び大地へ下降して、優れたものと劣れるものの力を受け取る。かくて汝は、全世界の栄光を手に入れ、一切の不明瞭は汝から去るであろう。
このものは、すべての剛毅のうちでも、いやがうえに剛毅である。なぜなら、それはあらゆる精妙なものに打ち勝ち、あらゆる個体に浸透するから。
　かくて大地は想像された。したがって、このものを手段として、驚異すべき順応がなされるであろう。
　ソフィアの全ての秘密を知る権利を彼に譲った。
このため私は、全世界の哲学の三部をもつ三重に偉大なる者と呼ばれる。私が太陽の働きについて述べたことは以上で終わる。
「ソフィアを連れ戻せるのは、アズラエルしかいないのよ。――――ソフィアが唯一、心を残していった貴方しか……」
　エメラルド・タブレットはソフィアがアズラエルに託したものなのだ。
　空間に広がった大空はラグエル、ソフィア、イブリース共々収縮を始めた。瞳の力で広げたヘブンへの道である。元ある場所へ引き返す力が彼らを収束しているのだ。
「ソフィア！」
　イブリースが歩美へと手を伸ばした。
　その瞳は赤い。
「アズラエル……」
　彼らの足元は既に空にあり、アズラエルが伸ばす腕は歩美には届かない。
「これで私も帰れるわね」
「違う！　君はもう、帰れない！」
　空色に巻き込まれながら、アズラエルとソフィアは必死に歩美の

腕を取ろうとする。だが、歩美は彼らからわざと離れた。
「そうね。私は元の生活には帰れない。安心して。この瞳は私が大事に持って逝くわ」
ソフィアから瞳を奪い、瞳を持ったまま歩美が死ぬことで瞳の転生は歩美で止まる。それは、瞳の影響を受けた者が世界に二人存在したことによる副作用だ。
これから死ぬために帰るというのに不思議と震えはなかった。
電車が来るあの時に帰るのだ。
「行くな！」
既にソフィアもラグエルも空に帰った。最後まで残っていたアズラエルも上半身を残すのみとなっている。
「それは誰を呼んでいるの？」
応えて笑うと、アズラエルは伸ばしていた腕の力を緩めた。
「さぁ、帰って」
空がアズラエルを飲み込む。
彼は無言で歩美を見つめた。
「そんな顔をしないで。ソフィアが待っているわ」
三人を飲み込んだ空はすぐにエメラルド・タブレットを修復する。だが、
『――――……また、迎えに行く』
空が無くなる数瞬前に、アズラエルの声が暗闇に響いた。
「……いいえ。アズラエル。貴方が迎えに来たのは、ソフィアよ」
そしてソフィアは既に彼の手に。
「エメラルド・タブレット。私はもう元の世界に帰るわ」
呟いた歩美の声に従って、タブレットは移動を始めた。
時間と空間をほぼ一瞬のうちに遡り、歩美は目を閉じる。

手に鞄の感触が戻っていた。
目を開けば電車の警笛が聞こえる。

明るいヘッドライトが全身を打った。
「あ」
また、遺書の入った鞄を持ったままだ。
歩美は苦笑しながら、踏み外した足をそのまま投げ出した。

22

きんと張り詰めた音が耳を劈いた。
その痛みで歩美は目を開けた。
暗闇ではない。
見上げれば蒼空、地上には廃墟が広がっている。
打ち壊されて数十年は経っているだろうか。
いや。
廃墟は劣化というよりも風化している。数百年の年月が経っているのだ。
穏やかな雲の運行の下で、歩美は茫然と地面に座り込んだまま辺りを見回した。
風化と砂漠化の進んだ廃墟に人の姿などない。それどころか生き物の気配すらない。
碧玉の瞳をもってしても、歩美以外の生物を感じられないのだ。
「……ここは一体……」
歩美の姿は制服のままだ。ブレザーにプリーツスカート。磨り減ったローファー。唯一、鞄が手にないだけ。
「……また、何処かに飛んだ……？」
「――いいえ」
艶やかな声には覚えがあった。
見上げると声に伴った黒髪の美女が立っている。
「……ヘカテ……。秘密を知る魔女……」
「お久しぶりね。碧玉のお嬢さん」
ヘカテは廃墟にそぐわない清浄な空気を纏ったまま、歩美を見下ろす。
「タブレットに関わった者は皆、不幸になるわね」
彼女は少し憂いめいて目を細めた。
「レミエルのこと……？」

「彼はとても不幸だった…。来世での幸せを祈るわ」
でも、とヘカテは歩美に黒の瞳を向ける。
「貴女は見事に運命を変えた」
「私が？」
「そう。ソフィアとアズラエルをヘブンに帰すことができたわ」
「……無事に帰れたのね」
「でも、貴女自身の運命を変えられなかった」
「え？」
ヘカテは廃墟を見回す。
「ここが何処だかわかる？」
わかるはずがない。
首を振ると、ヘカテは憐憫を目に湛えた。
「アースよ」
「アース……？　いつの時代……？　私以外に生き物がいない……」
「そうね。貴女以外、生きている者はないわ」
「そんな……。まさかまだヘカテの庭に居るの？」
「私の庭は鏡の庭。アースの風景に似せて姿を変えるのよ。――――見てごらんなさい。貴女自身を」
そうヘカテに手の平を差し出されると、歩美の視界は一変する。

電車の警笛。
地下を貫くヘッドライト。
眼前では、歩美がホームから飛び出していた。
その彼女から声が聞こえる。
『壊れてしまえ』
「え……？」
『こんな世界は壊れてしまえ』

ヘッドライトと彼女の姿が重なった。
同時に、電車が横転した。
地下を支えていたはずの柱は外れ、尽く打ち壊れる。
陥没した地面から人々が逃れられるはずもなく、悲鳴もないまま地面に沈む。
大音響に耳を塞いだ歩美は地上に居た。
ひび割れた大地に廃墟が広がっている。
大地震が起こったのか。
大噴火が起こったのか。
歩美は困惑のまま周囲を見渡した。
人の姿はない。
『誰も、居なくなった……』
眼前には座り込んでいる歩美がいる。
『これで、私以外誰もいない……！　私は、自由だ！』
陶然と叫ぶ自分が居た。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！」
頭を掻き毟る。
「お父さん！　お母さん！」
「いないわ。そんな人。貴女は一人になったのよ」
「私は……わたしは……！」
「そう。貴女がアースを壊してしまったの。お父さんもお母さんもみんな殺してしまったのよ」
「私は悪くない！」
「そうね。悪いのは、貴女を苛めたクラスメイトと碧玉の瞳」
「私は悪くないのよ！」
「でも結果を求めたのは貴女よ」
いつのまにか、歩美の眼前に立っているのは、黒髪の魔女ではな

く、いつかの歩美自身だった。
「貴女が望んだのよ。この何もない自由を」
「違う違う違う違う違う！」
声が枯れた。
だが瞳は冷徹に真実を告げる。
地下鉄に飛び降りた歩美は絶望していた。
そして願ったのだ。
ソフィアが、アズラエルにエメラルド・タブレットを託すことだけを願ったように、歩美は自分の嫌いな世界を壊すことを。
「嫌よ！　こんな世界！　こんなの……自由じゃない！」
「――――――じゃぁ、またやり直す？」
冷たい指先が歩美の頬に触れた。
泣いているのか。
否。
歩美は、子供が気に入らない玩具を取り替えてもらう時のように、笑っていた。

23

「……結局、元に戻してしまったわね」
黄金色の爪を水晶の丸みに預けて、ヘカテは息を吐き出した。
「五回目……。五回目の人生を彼女はこれから辿るのですか」
長いブロンドの男はヘカテの水晶を見つめて、紫の双眸を細める。
「佐々木歩美というこの少女は、何回人生をやり直せば気が済むのでしょうね」
「ラファエル」
ヘカテは水晶から黒瞳を移す。
「彼女はいつも同じカードを引いてしまうの。そして引かせているのはラファエル。貴方よ」
「私は見たいだけですよ。それに、今回はアズラエルとイブリースのことがわかりましたからね。ソフィアも帰ってきたことだし、僕の研究は順調ですよ」
「運命についての論理の研究……。つくづく倫理観の薄い男ね」
ヘカテは肩を竦めてみせるラファエルから視線を外して、水晶をなぞった。
「とんでもない。僕は極めて道徳的ですよ。変化よりも秩序を重んじていますから――――それに、わからないことがあるというのはとても楽しいものですよ。ヘカテ」
笑うラファエルを無視して水晶は街を映し出す。
それは、背の高いビル郡。
その一角にある病院では、一人の女の子がイギリス人と日本人との間に生まれていた。
「今度は無修正で彼女を監視するつもりなのね？」
「僕は万能ではありませんから」
ラファエルは口の端を上げる。
「ここからは、あなたの自由ですよ」

24

病院の廊下に二人の医師が居る。
「飽きないねぇ」
一人の白衣がそう小声で言った。
保育器の並ぶ無菌室の窓から一人の赤ん坊に手を振った男は肩までの茶髪の、端正な容貌である。彼は神秘的でさえある容姿に似合わない軽口で隣の長身の黒髪に言葉を投げる。
「仕事だ」
白衣を着てはいるが殺伐とした口調で長身の男は応えた。
「アズラエルってそればっか」
茶髪の男は笑いながら肩を竦める。
「お前こそ物好きだな。ラグエル」
「知らなかったぁ？　俺は酔狂で有名なのよ」
いつもの軽口を叩いて、茶髪の男、ラグエルは笑みを抑えた。
「――はっきり言って、この子の運命なんてどうでも良かったんだけどさ。今度こそ、助けてやりたくなったんだよ。俺を助けてくれたしね」
お前は、とでも言うようにラグエルは長身の男、アズラエルに視線を向けた。
「そうだな――――…」
アズラエルは保育器に収まっている黒髪の赤ん坊を見つめる。
その、小さな手に握りこんでいるのは幸運か、不幸か。
「……迎えに来た」
低い声が赤ん坊に届いたのだろうか。
大きな翠の瞳が微笑むように煌めいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8917k/

碧玉の瞳

2010年10月8日12時31分発行